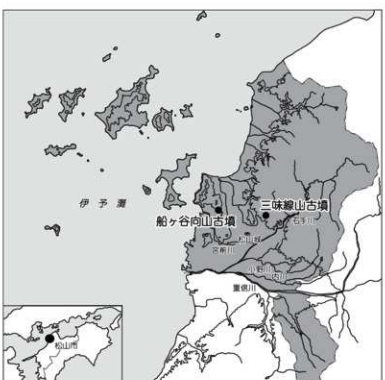
三味線山古墳
船ヶ谷向山古墳

2014

松山市教育委員会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

三味線山古墳
船ヶ谷向山古墳



2014

松山市教育委員会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版　船ヶ谷向山古墳出土埴輪

序　言

本書は、昭和50年代から60年代にかけて道後平野北部において実施された古墳の調査成果をまとめた報告書です。

祝谷東町の三味線山古墳では、横穴式石室や箱式石棺から人骨が出土したほか、珍しい古墳時代前期の乳児埋葬の例が確認されました。

船ヶ谷町の船ヶ谷向山古墳は、低丘陵の先端付近に築造された古墳時代中期の前方後円墳と考えられます。その埋葬施設については既に失われていましたが、墳丘内外から古墳に立て並べられていた埴輪が多数出土しました。中でも形象埴輪は、人物、馬、鶏、蓋、家などバラエティーに富んだ構成となっており、これも松山市内では珍しい発見と言えるでしょう。また、数少ない松山平野北部での前方後円墳の発掘調査事例として、以降の古墳調査・研究を進めてゆく上で貴重な資料となりました。

このような成果をあげることができましたのも関係各位のご協力のたまものと、心より感謝申し上げます。

本書を地域の古墳や歴史研究の資料として役立てていただければ幸いに存じます。

平成26年３月

松山市教育長　山本　昭弘

例　　言

1．本報告書は、松山市教育委員会が1981（昭和56）年に松山市祝谷東町で実施した「三味線山古墳」、1988（昭和63）年に松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センターが船ヶ谷町において実施した「船ヶ谷向山古墳」の発掘調査報告書である。

2．三味線山古墳の調査は松山市道道後354号線山留復旧工事に伴う調査として松山市道路維持課の協力のもとに、船ヶ谷向山古墳の調査は教団施設建築に伴う調査として宗教法人霊法会の協力を得て実施された。

3．遺物の実測・製図、遺構図の製図等は、大野裕子、築山知子、西本三枝、丹生谷道代、日之西美香、山崎萬喜子が行った。

4．遺構の撮影は、調査担当者が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。

5．遺物図は、土器を1／4に、鉄器・鉄製品を1／2で掲載した。

6．使用した方位は磁北である。

7．三味線山古墳出土人骨について、土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアム 松下真美・松下孝幸両先生による分析をお願いし、玉稿を賜った。記して御礼申し上げます。

8．本報告にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されている。

9．本報告書の執筆・編集は、栗田茂敏が行った。

目　次

第１章はじめに……1
第１節　環　境……1
第２節　刊行組織……6

第２章　三味線山古墳……7
第１節　調査に至る経緯……7
第２節　調査組織……7
第３節　立　地……8
第４節　遺構と遺物……9
第５節　まとめ……26

第３章　船ヶ谷向山古墳……27
第１節　調査に至る経緯……27
第２節　調査組織……28
第３節　遺構と遺物……28
第４節　まとめ……79

附　編　愛媛県松山市三味線山古墳出土人骨……80
松下真美・松下孝幸

挿図目次

第１章はじめに

第１図　調査地と周辺の主要遺跡（Ｓ＝１：50,000）……3

第２章　三味線山古墳

第２図　三味線山古墳の位置（Ｓ＝１：5,000）……8
第３図　調査前コンターと検出遺構……9
第４図　１号墳横穴式石室測量図……10
第５図　１号墳横穴式石室人骨・副葬遺物出土状況図　……11
第６図　１号墳横穴式石室出土遺物（１）……13
第７図　１号墳横穴式石室出土遺物（２）……14
第８図　１号墳横穴式石室出土遺物（３）……15
第９図　１号墳横穴式石室と周溝……16
第10図　ＳＸ１出土遺物（１）……17
第11図　ＳＸ１出土遺物（２）……18
第12図　ＳＸ１出土遺物（３）……19
第13図　ＳＸ１出土遺物（４）……20
第14図　ＳＴ１測量図 ……21
第15図　ＳＴ１出土遺物 ……22
第16図　２号墳箱式石棺測量図 ……23
第17図　２号墳箱式石棺展開図および人骨出土状況図　……24
第18図　２号墳全測図 ……25

第３章　船ヶ谷向山古墳

第19図　調査地位置図（Ｓ＝１：5,000）……27
第20図　調査後墳丘コンター図 ……29
第21図　墳丘全測および調査地の区割り図 ……31
第22図　円筒埴輪列検出状況図 ……33
第23図　円筒埴輪列出土遺物 ……34
第24図　Ｅ区遺物出土状況図 ……35
第25図　Ｅ区出土遺物（１）……38
第26図　Ｅ区出土遺物（２）……39
第27図　Ｅ区出土遺物（３）……40
第28図　Ｅ区出土遺物（４）……41
第29図　Ｅ区出土遺物（５）……42
第30図　Ｅ区出土遺物（６）……43
第31図　Ｅ区出土遺物（７）……44

第32図　E区出土遺物（8）……45
第33図　E区出土遺物（9）……46
第34図　E区出土遺物（10）……47
第35図　E区出土遺物（11）……49
第36図　E区出土遺物（12）……50
第37図　E区出土遺物（13）……51
第38図　E区出土遺物（14）……52
第39図　E区出土遺物（15）……53
第40図　E区出土遺物（16）……54
第41図　7区遺物出土状況図 ……56
第42図　7区出土遺物（1）……57
第43図　7区出土遺物（2）……58
第44図　7区出土遺物（3）……59
第45図　7区出土遺物（4）……60
第46図　7区出土遺物（5）……61
第47図　7区出土遺物（6）……62
第48図　7区出土遺物（7）……63
第49図　7区出土遺物（8）……64
第50図　7区出土遺物（9）……65
第51図　7区出土遺物（10）……67
第52図　7区出土遺物（11）……68
第53図　7区出土遺物（12）……69
第54図　1区出土遺物（1）……71
第55図　1区出土遺物（2）……72
第56図　2区出土遺物 ……73
第57図　3区出土遺物 ……74
第58図　4区出土遺物 ……75
第59図　出土地点不明遺物 ……76
第60図　古墳に伴わない遺物（1）……77
第61図　古墳に伴わない遺物（2）……78

附　編　愛媛県松山市三味線山古墳出土人骨

図1　遺跡の位置（1／25,000）……81
図2　人骨残存図（三味線山古墳1号墳）……83
図3　人骨残存図（三味線山古墳2号墳・ＳＴ1）……84

表目次

附　編　愛媛県松山市三味線山古墳出土人骨

表１　資料数……80
表２　出土人骨一覧……82
表３　年齢区分……82
表４　上腕骨計測値（男性、右、㎜）……86
表５　大腿骨計測値（男性、右、㎜）……86
表６　顔面頭蓋（㎜、度）……88
表７　上腕骨（㎜）……88
表８　橈骨（㎜）……88
表９　大腿骨（㎜）……89
表10　腓骨（㎜）……89
表11　形態小変異……89

写真図版目次

巻頭図版　船ヶ谷向山古墳出土埴輪

三味線山古墳

図版１　１．調査地遠景（南西より）
　　２．調査前近景（南より）
　　３．調査風景近景（南西より）
図版２　１．１号墳横穴式石室検出状況（南より）
　　２．１号墳横穴式石室床面検出状況（北より）
　　３．１号墳横穴式石室鉄製品検出状況（北より）
図版３　１．１号墳横穴式石室床面調査状況（南より）
　　２．１号墳横穴式石室床面遺物出土状況
　　３．１号墳横穴式石室西側壁（南東より）
図版４　１．１号墳横穴式石室完掘状況（南西より）
　　２．ＳＸ１墳輪出土状況（東より）
図版５　１．２号墳箱式石棺露出状況（南東より）
　　２．２号墳箱式石棺被覆粘土の状況（西より）
　　３．２号墳箱式石棺全景（１）（北上方より）
図版６　１．２号墳箱式石棺全景（２）（西より）
　　２．２号墳箱式石棺人骨出土状況（１）（西より）
　　３．２号墳箱式石棺人骨出土状況（２）（東より）
　　４．２号墳箱式石棺完掘状況（西より）

図版７　１．１号墳周溝とＳＴ１（西より）
　　２．ＳＴ１近景（西より）
　　３．ＳＴ１乳児骨出土状況
図版８　１．１号墳横穴式石室出土遺物（１）
図版９　１．１号墳横穴式石室出土遺物（２）、ＳＸ１出土遺物（１）
図版10　１．ＳＸ１出土遺物（２）、ＳＴ１出土遺物

船ヶ谷向山古墳

図版11　１．上空より見た調査地の現況（北西より）
　　２．船ヶ谷遺跡２次調査地から望む調査地の現況（東より）
　　３．掘削風景（北より）
図版12　１．Ｅ区遺物出土状況（１）（西より）
　　２．Ｅ区遺物出土状況（２）（南西より）
　　３．Ｅ区遺物出土状況（３）（北より）
図版13　１．Ｅ区馬形埴輪出土状況（１）（北より）
　　２．Ｅ区馬形埴輪出土状況（２）（北東より）
　　３．Ｅ区馬形埴輪出土状況（３）（北西より）
図版14　１．墳丘６～７区円筒埴輪列（南東より）
　　２．７区遺物出土状況（１）（西より）
　　３．７区遺物出土状況（２）（北より）
図版15　１．７区遺物出土状況（３）（北西より）
　　２．７区人物埴輪出土状況（北西より）
　　３．７区家形埴輪出土状況（西より）
図版16　１．７区鶏形埴輪出土状況（１）（北より）
　　２．７区形象埴輪群（１）（南東より）
　　３．７区形象埴輪群（２）（北西より）
図版17　１．７区鶏形埴輪出土状況（２）（西より）
　　２．７区鶏形埴輪出土状況（３）（北より）
　　３．７区鶏形埴輪出土状況（４）（北西より）
図版18　１．完掘状況全景（北東より）
　　２．Ｅ区完掘状況（南東より）
　　３．７区完掘状況（南西より）
図版19　１．円筒埴輪列出土遺物、Ｅ区出土遺物（１）
図版20　１．Ｅ区出土遺物（２）
図版21　１．Ｅ区出土遺物（３）
図版22　１．Ｅ区出土遺物（４）
図版23　１．Ｅ区出土遺物（５）
図版24　１．Ｅ区出土遺物（６）

図版25　1．E区出土遺物（7）
図版26　1．7区出土遺物（1）
図版27　1．7区出土遺物（2）
図版28　1．7区出土遺物（3）
図版29　1．7区出土遺物（4）
図版30　1．出土地不明遺物、古墳に伴わない遺物

第１章　はじめに

第１節　遺跡をめぐる環境

（１）地理的環境

松山平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の２大河川がある。この２河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、西方の海岸線から約４kmの通称「出合」で合流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみてみると、平野北方の石手川扇状地、およびその西方にひろがる氾濫原、扇状地の北に延びる沖積低地、平野南方の重信川扇状地、およびその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原に加えて、両河川の中間にあって石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。そのうち、平野北方の沖積低地は、東方の高縄山系南西面と、西方の太山寺山塊東面との間の、東西幅約２～４km、南北長約７kmにわたってひろがる地溝性の低地となっている。本書で報告される古墳のうち、三味線山古墳は石手川右岸の高縄山系南西麓160～170mにあって石手川・重信川扇状地を眼下おさめ、伊予灘を経て条件のよい日には対岸の中国地方までを望める位置にある。一方、船ヶ谷向山古墳は上述の沖積低地西方に位置する松山市船ヶ谷町の低丘陵東面、標高29～31mに位置している。

（２）歴史的環境

松山平野の遺跡群について、下條信行は弥生時代の集落遺跡分布を、その地形的特性を考慮しながら７つの遺跡群に分けたが、近年これに基づき再検討した柴田昌児はさらに１遺跡群の抽出を行い、さらに遺跡群名の改称等を経て、以下の８遺跡群に再整理を行っている。

（Ⅰ）和気遺跡群　（Ⅱ）三津遺跡群　（Ⅲ）道後城北遺跡群　（Ⅳ）久米遺跡群

（Ⅴ）祇部遺跡群　（Ⅵ）伊予遺跡群　（Ⅶ）川内町遺跡群　（Ⅷ）石井・浮穴遺跡群

この分類を妥当なものと評価した下條は、さらにこの集落遺跡分布が古墳時代にもそのまま被っていると指摘した。そこで、この項では本書で報告される２古墳について、以上の遺跡群分類にのっとりながらその歴史的環境を述べていくことにする。

三味線山古墳は祝谷東町に所在し、「（Ⅲ）道後城北遺跡群」を直近の眼下に控えた丘陵上に位置している。松山平野において旧石器時代の遺構が確認された例はないが、調査地近隣では採集資料として祝谷丸山遺跡の細石核、細石刃がある。緑色チャートを主な素材とするこれらの資料は、十亀幸雄氏によって紹介され、のちに多田仁氏により詳細に分析され、評価を与えられている。

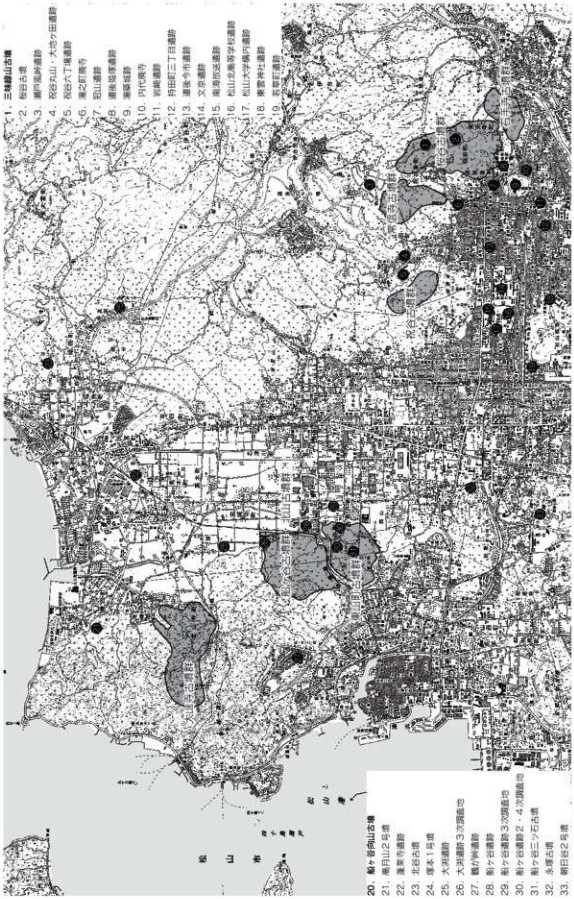
この地域で遺構や遺物として遺跡が確認できるのは、縄文時代後期以降のことである。文京遺跡

は、勝山（松山城）北方の愛媛大学城北キャンパスを中心にひろがる弥生時代中～後期の拠点集落としてつとに名を知られているが、縄文時代の遺跡としても認知され始めている。松山東中学校構内で行われた文京遺跡の４次調査では縄文中期の土器片の出土があり、文京エリアにおける縄文時代では今のところ最も古い例となっている。縄文後～晩期の屋外炉や火処、また柱穴、土坑、住居址などは11次調査や、近年の35・39・45次調査などで検出されている。これらの調査のみではなく、後・晩期の包含層は８・９次調査、また、近隣の南海放送遺跡でも確認されており、愛媛大学構内を中心とした縄文時代後～晩期集落のひろがりが明らかになりつつある。また、愛媛大学北東約0.6㎞の道後今市遺跡では11号土坑より22点の晩期後葉の遺物の出土があり、一括性の高い基準資料として評価されている。その他、持田町三丁目遺跡や岩崎遺跡でも後・晩期の遺物の出土がみられている。

弥生時代前期の遺構としてよく知られているのは、文京遺跡４次調査での前期前半の松菊里型住居がある。また、先述の持田町三丁目遺跡では、前期前半～後半の土坑墓・木棺墓・土器棺墓群が、一部、副葬子壺や石剣を伴って検出されており、弥生前期の墓域の調査例として稀少な資料となっている。その他、前期では御幸寺山出土の綾杉文壺が学史的にはよく知られているが、遺構等の詳細はよくわかっていない。弥生時代も中期以降になると遺跡数は格段に増加する。まず、前期末から中期初頭の遺跡には道後冠山遺跡、姫塚遺跡、土居窪遺跡等、学史的によく知られた遺跡が多い。また、近年では岩崎遺跡でもこの時期の溝や土坑が多数検出されている。中期中葉の遺跡は、主に扇状地縁辺の丘陵あるいは分離丘陵上で検出されている。扇状地北の祝谷地区の丘陵には六丁場遺跡、大地ヶ田遺跡が分布し、また、勝山丘陵上では東雲神社遺跡がよく知られている。平地部でのこの時期の遺構は、文京遺跡３次調査や岩崎遺跡で散見されるが、やはり丘陵部に比べると希薄であり、大きくみるとこの時期における集団の丘陵部への移動という傾向を認めることができる。中期後半から後期前半にかけては、先述の文京遺跡が盛期を迎える時期である。集落の中心部に超大型の掘立柱建物や、溝を伴う方形の祭壇とされる方形周溝状遺構を配置し、東西300ｍ、南北200ｍの範囲に大小の竪穴住居・掘立柱建物が密集している。出土するものには、多量の土器・石器のほか、鉄製武具・工具、鉄滓・ガラス滓、破鏡、石製指輪、多量の炭化米といった具合で、松山平野にあって盟主的な拠点集落であったものと考えられている。後期中葉～末にかけての遺跡は、やはりこの文京遺跡西方直近の松山大学構内遺跡や松山北高遺跡、あるいはさらに西方の若草町遺跡など勝山丘陵の北～北西部や、石手川を南に越えた桑原・枝松・東本遺跡や釜ノ口遺跡など、扇状地上の各地域に拡散している。これらのうち、若草町遺跡では弥生時代終末の墳丘墓に伴って大量の土器が出土し、また包含層資料ではあるが、ほぼ完形の重圏日光鏡が出土している。

古墳時代の集落は、弥生時代にくらべるとこの地域ではやや希薄ではあるが、文京遺跡や松山大学構内遺跡、北高遺跡、道後今市遺跡などに中～後期の集落が存在してはいるものの弥生時代ほどの濃密さはない。石手川右岸の道後城北地区ではなく、左岸の久米遺跡群の樽味高木・四反地遺跡、東本遺跡などに古墳時代の集落が濃密に分布するようになる。

古墳は、三味線山古墳の位置する高縄山系南西麓に、後期を主とした古墳群が多く分布している。石手寺古墳群、桜谷古墳群、常信寺山古墳群、祝谷古墳群などである。調査地南東0.4kmの丘陵上では1968（昭和43）年に桜谷古墳が調査され、東西方向の稜線上で横穴式石室、小竪穴式石室、箱式石棺、土坑墓それぞれ１基ずつが調査されている。報告では順に１～４号墓と命名されており、１号墓について報告では竪穴式石室とされているが、６世紀前半代の無袖の横穴式石室である可能性が高



第1図　調査地と周辺の主要遺跡（S＝1：50000）

い。愛媛県教育委員会により1991（平成３）年にまとめられた「愛媛県内古墳 分布調査報告書」によれば、桜谷古墳群内には13基の古墳が把握されており、南に隣接する石手寺古墳群内を含めて桜谷と名のつく古墳が15基存在しているが、そのほとんどについては内容が不明の古墳となっている。上述の桜谷古墳として報告された４基の墓のうちでは、１号のみが桜谷１号墳という古墳としてこの分布調査報告には掲載されている。

また、北方0.4km一帯の瀬戸風峠遺跡では、宅地開発に伴う発掘調査が1995（平成７）年から1997（平成９）年にかけて実施され、５基の横穴式石室を主体部とする後期古墳や８基の箱式石棺、１基の石蓋土坑墓が調査された。箱式石棺や石蓋土坑墓の時期は明確にされてはいない。横穴式石室に切られるいくつかのものについては６世紀中頃を遡るものというところまではわかっているが、詳細な年代は不詳となっている。

古代では、白鳳時代の寺院址である湯之町廃寺、内代廃寺が道後地区に存在していることが知られており、中世以降の遺跡では、南北朝以降250年にわたって伊予を支配した河野氏の居城である湯築城跡がよく知られている。昭和63年・平成元年度以来十数年にわたる大小の調査を経て国指定となり、史跡公園として整備され今日に至っている。また、道路整備を主とした周辺の調査で、湯築城下の様子も明らかになりつつある。

一方、船ヶ谷向山古墳は、平野北西部の「（Ⅰ）和気遺跡群」に含まれるエリアに位置している。この地域での遺物・遺構の確認例のうちで最も遡るものは縄文時代後期の遺物群で、馬木町所在の蓬莱寺遺跡や、太山寺町の大渕遺跡において、包含層資料として後期中葉から後葉までの遺物の出土がみられている。遺構として人間の生活の痕跡が確実に確認できるのは縄文時代晩期中葉以降のことである。古墳直近の船ヶ谷遺跡では晩期突帯文を遡る時期の河川、杭列、住居址が多量の土器、石製品、木製品とともに検出されている。大渕遺跡では、後期に引き続き、晩期前葉から晩期末までの遺物の出土があり、晩期後半の遺物を出土する土坑群が調査されている。また、晩期後半の遺物を出土する包含層からは大量のイネ花粉や炭化籾の検出とともに、丹塗り壺、カジ紋壺や石庖丁、石鎌などの大陸系磨製石器の出土もあり、当平野における稲作関連の最も古い例として注目されている。これらの遺跡は先述の沖積低地に立地する遺跡であるが、例が少なかったこの低地上での発掘調査例も少しずつ増加しており、弥生時代に関しては注目される調査例もみられはじめている。太山寺町の市営三光団地内、大渕遺跡３次調査では中～後期の土器が流路内から出土している。また、西長門の船ヶ谷遺跡４次調査の流路からは前期から後期の遺物の出土したほか、前期から後期まで各期の井戸が検出されている。これらの井戸のうち、前期の１基は壺形土器の底部を抜いたものを井戸側として利用していて注目された。

古墳時代の集落そのものの確認例はさほど多いものではないが、先述の大渕遺跡３次調査で前期の竪穴建物数棟と古式土師器を多量に出土する流路や後期の掘立柱建物数棟が検出されている。また、西長戸で行われた船ヶ谷遺跡２次調査では、４世紀末から６世紀前半の祭祀土坑を伴う集落遺構が調査された。同じく、船ヶ谷遺跡４次調査では、古墳時代初頭から後期の集落や流路の検出があり、陶質土器や軟質土器、非陶邑系須恵器など多量の遺物の出土がみられている。これらの集落に対して古墳そのものは周辺の丘陵上に数多く分布している。調査地近隣の船ヶ谷三ツ石古墳では、向山古墳２基の円墳とみられる墳丘や周溝の一部が調査され、５世紀末～６世紀初頭の周溝内祭祀の可能性を窺わせる須恵器群が出土している。太山寺山塊北面の勝岡町高月山古墳群の７基の古墳のうち２号墳

は、箱式石棺を主体部とする小長方墳で、周溝内より布留Ⅰ式期併行の土師器壺や鋼鏃を出土しており、この地域のみならず平野内でも古い段階の古墳のひとつである。船ヶ谷向山古墳や高月山古墳は第１節で述べた平野北部の沖積低地西方の大山寺山塊の東麓に位置するものであるが、同じ大山寺山塊の南西面、伊予灘を望む丘陵には鵜が峠古墳群が分布している。丘陵稜線に連続して営まれた５世紀末の円墳群は10数基を数え、その多くは形象埴輪を含んだ埴輪群を伴っている。主体部についてはわかってないことが多いが、同時期の１基は竪穴式石室を主体部とするものであった。また、この古墳群では、後期の横穴式石室を主体部とする古墳も５基調査されたが、そのうちの１基には石屋形が設けられており、県内唯一の例となっている。大山寺山塊を挟んだ沖積低地東方の高縄山系南西麓、先述の桜谷古墳群などの道後城北エリアの古墳群の北方に続く丘陵にも多くの古墳群が分布している。そのなかでも福角町所在の市指定文化財北谷古墳や権現町所在の塚本１号墳など、大型石材を用いた横穴式石室を主体部とする６世紀末から７世紀前半代の円墳・方墳がこのエリアでの首長系譜に連なる古墳としてよく知られている。

ところで、船ヶ谷向山古墳は報告されるとおり前方後円墳である可能性が高いので、遺跡群を離れるが、ここで松山平野北部域、石手川以北の前方後円墳についてみておく。船ヶ谷向山古墳の南2.8㎞の朝日ヶ丘にかつて所在した朝日谷２号墳がある。標高133ｍの独立丘陵北西側中腹71ｍ付近の稜線を切断して設けられたもので、全長29ｍを測る。後円部の２基の木棺のうち１基から２面の後漢鏡、鉄剣、鉄鏃、鋼鏃などを出土、当平野における出現期の前方後円墳である。その海を意識した立地から海上交通権を掌握していた３世紀後半代の首長の墓とみられている。船ヶ谷向山古墳南1.9㎞の衣山に、これもかつて存在した永塚古墳がある。６世紀後半の古墳で、全長28ｍ超の墳丘規模のもので、平野でも最終末の埴輪を出土している。これら朝日谷２号墳、船ヶ谷向山古墳、永塚古墳の３基が現在知られている平野北部域における前方後円墳のすべてである。

古代以降のこの地域については不明な部分が多い。現在のところ、船ヶ谷遺跡３次調査の掘立柱建物、柵列、井戸等で構成された中世村落遺構などが遺跡として知られている主なものである。

文　献

梅木謙一 ほか　『朝日谷２号墳』 松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1998

「船ヶ谷三ッ石古墳の調査」『和気・堀江の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993

岡野　保　『北谷古墳（墳丘・石室実測調査報告書）』松山商科大学史跡研究会 1980

加島次郎　『船ヶ谷遺跡－３次調査地－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1999

栗田茂敏　「文京遺跡４次調査」『道後城北遺跡群』松山市埋蔵文化財センター 1992

『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991

『鵜が峠遺跡Ⅰ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2007

『鵜が峠遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2008

栗田茂敏・武正良浩『大渕遺跡－１・２次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2000

阪本安光ほか『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会・愛媛県立松山北高等学校 1981

阪本安光『松山市・船ヶ谷遺跡』 愛媛県教育委員会 1984

下條信行「松山平野と道後城北の弥生文化」『松山大学構内遺跡－第２次調査－』松山大学・松山市教育委員会・
松山市埋蔵文化財センター 1991
「久米遺跡群の展開と葉佐池古墳」『葉佐池古墳－３・４・５次調査－』松山市教育委員会・
松山市埋蔵文化財センター 2010
柴田昌児「松山平野における弥生社会の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告　第149集』国立歴史民俗博物館 2009
高尾和長「船ヶ谷遺跡－２次調査－」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1999
多田　仁「道後今市遺跡Ⅹ」愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994
西尾幸則「道後城北RNB遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1989
西尾幸則ほか『来住廃寺』松山市教育委員会 1979
西田　栄「冠山遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県 1986
真鍋昭文『持田町三丁目遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1995
宮崎泰好『高月山古墳群調査報告書』松山市教育委員会 1988
宮本一夫ほか『文京遺跡第８・９・11次調査』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室 1990
『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室 1991
山之内志郎・高尾和長『船ヶ谷遺跡－４次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2002
吉岡和哉『大湯遺跡－３次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2000
『愛媛県内古墳－分布調査報告－』愛媛県教育委員会 1991
『松山市史　第二巻　近世』松山市 1997
『松山市史料集 第２巻　考古編　Ⅱ』松山市教育委員会 1987

第２節　刊行組織

松山市教育委員会	教育長　山本　昭弘	
事務局	局　長　桝田　二郎	
	企画官　梶川　明彦	
	企画官　津田　慎吾	
文化財課	課　長　若江　俊二	
	主　幹　篠原　昭二	
公益財団法人松山市・文化スポーツ振興財団	理事長	中山紘治郎
	事務局長	中西　真也
	事務局次長兼総務部長	中野　　忠
施設利用推進部	部　長	玉井　弘幸
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	田城　武志
	調査・研究リーダー	山之内志郎
		橋本　雄一
	普及・啓発リーダー	梅木　謙一
	担　当	栗田　茂敏

第２章　三味線山古墳

第１節　調査に至る経緯

1981（昭和56）年、松山市道路維持課は松山市祝谷東町において、松山市道道後354号線の山留復旧工事を計画した。工事地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地「№58 桜谷古墳群」に該当する範囲に含まれていたため、同年10月、松山市教育委員会文化教育課（以下、「文化教育課」）が現地踏査を行ったところ、工事により切土が予定されている丘陵上に箱式石棺の一部が露出していることが確認された。これを受けて文化教育課と道路維持課との間での協議が持たれたが、古墳の保存は難しく、このため、工事予定用地約500㎡のうち、この石棺を含め墳丘の広がりが予想される範囲およそ100㎡について緊急発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

石棺は丘陵稜線上を下った南端、標高160mの位置に主軸を東西方向に向けて露出していたが、同年11月１日より開始された発掘調査の一環として、この稜線沿いにトレンチを掘削して確認したところ、石棺の北方約30m、標高170mの位置においてほぼ全壊状態の横穴式石室の一部が確認された。このため、調査範囲をこの２基が所在する丘陵南西斜面全体に広げた結果、最終的な調査面積は約350㎡ということになった。

調査は、トレンチにより発見された横穴式石室墳を１号墳、当初より一部露出の箱式石棺墳を２号墳として20日あまりの調査期間を設けて実施された。

第２節　調査組織

松山市教育委員会	教育長	西原多喜男
文化教育課	課長	藤原　渉
	課長補佐	坪内　晃幸
	第二係長	大西　輝昭
	主任	西尾　幸則
	調査員	池田　学
		松村　淳

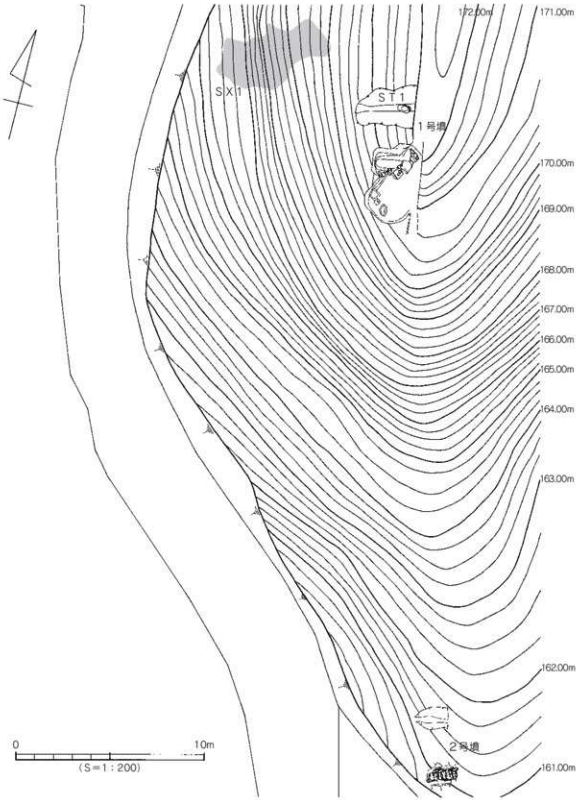
調査地　愛媛県松山市祝谷東町乙815番４
調査期間　1981（昭和56）年11月１日～1981（昭和56）年11月21日
調査面積　約350㎡

第3節　立　地

三味線山古墳は、高縄山系南西麓の標高160～170mに位置しており、調査前は松山市道354号線東側の法面および雑種地であった。山留工事が予定されている市道は、山腹を縫うように走りながら調査地南直近で分岐し、一方は南東方向の石手寺方面、また一方は南西方向の道後方面に向けて下っている。市道はこの位置から北上し、瀬戸風峠を経由して伊台方面へと抜けている。調査地からの眺望は南西から南方向に優れ、道後平野中央～南部を経て伊予灘、条件のよい日には遠く山口県西部や大分県東部までを望むことができる。

第２図　三味線山古墳の位置（S＝1：5,000）

第４節　遺構と遺物

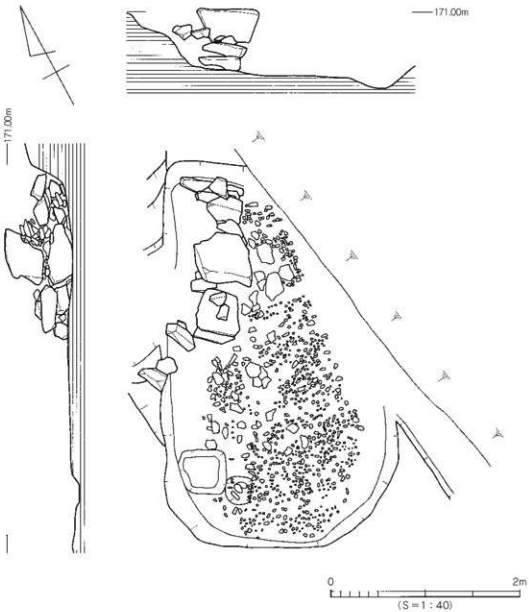


第３図　調査前コンターと検出遺構

（1）１号墳の調査

a．主体部（第４図）

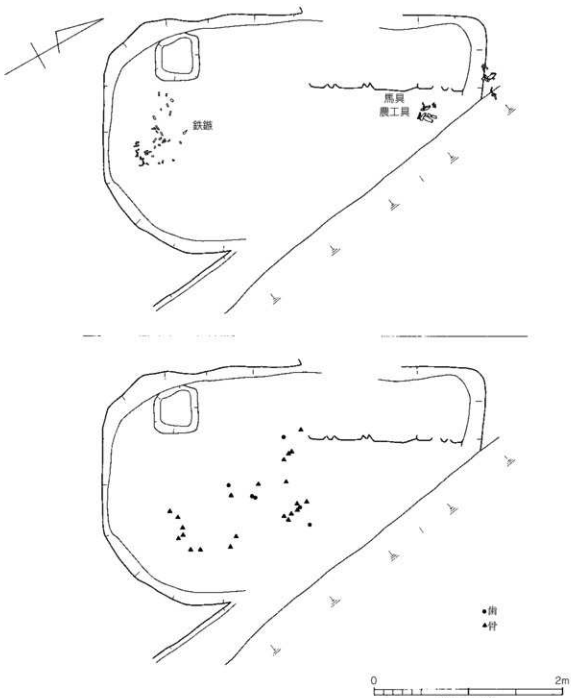
４×2.5mの隅丸長方形の墓壙の中に設けられた横穴式石室で、長軸は北東～南西方向である。壁体石材は北西側壁の基底部が僅かに残っているのみで、川原石による礫床も攪乱状態であった。隣地との境には稜線沿いに杉垣があり、この境に沿って溝が掘られている。墓壙および石室の北東側はこの溝に切られ、調査区外の隣地に及んでいる。丘陵の傾斜からみれば、開口方向は南西側であったものと思われる。墓壙内に存在するのは玄室で、入り口部分は墓壙外の南西に設けられ、段を降りて玄



第４図　１号墳横穴式石室測量図

室内へ進入する構造であったものと思われるが、削平されているため南西部の地山面にもその痕跡はない。墓壙南西端にはこの段を構成していたと考えられる石材や玄室側壁南西コーナー基底石の抜き痕が残っている。残存壁体の配置や基底石の抜き痕、攪乱されてはいるが床面礫の分布範囲などからすると、玄室規模およそ22×12m程度の規模の小型石室であったものと考えられる。

b．被葬者と遺物の出土状況（第５図）



第５図　１号墳横穴式石室人骨・副葬遺物出土状況図

玄室がほとんど壊滅状態であるので、本来の状況を残している可能性は低いが、人骨片、歯牙の出土位置は玄門部寄りに集中している。個体識別によれば、２体が埋葬されていたようである。これについては附編において詳述される。鉄製品は大きく２個所に分布が分かれている。人骨分布のさらに玄門部近くに散乱しているもののほとんどは鉄鏃、一方、奥側にまとまっているのが馬具と斧・鎌などの工具である。これらの一部は石室外にまで及んでいるが、傾向からすれば奥側の近隣に存在していたものと思われる。なお、土器としては玄室内唯一の出土である須恵器壺片は、鉄鏃片の一群の中から検出された。

c．主体部出土遺物（第６～８図）

須恵器

壺（１）　短い筒状の頸部から短く外反して口縁が開くもので、底部を欠く。復元器高13cm程度、口径9.2cmを測る。口端部は外斜した面を持ち、端部を内方に断面台形状に僅かに突出させている。ボウル状の胴部から鈍い稜を持って肩部が直線的にすぼまっている。

武　具

鉄鏃（２～51）　すべて長頸鏃、刃部の形状がわかるもの13点のうち２～12が三角形もしくはこれに準ずる柳葉形で、13・14が片刃となるものである。茎の断面は四角形、篦被は両関である。篦被部の数が12点となっており、刃部の点数とほぼ一致するので、おおよそ副葬された本数は13点程度であったものと思われる。

農工具

鉄鎌（52）　全長19.3cm、最大幅3.8cmの直刃鎌で、先端部が緩く刃側に湾曲する。基部を短く直角に折り曲げている。

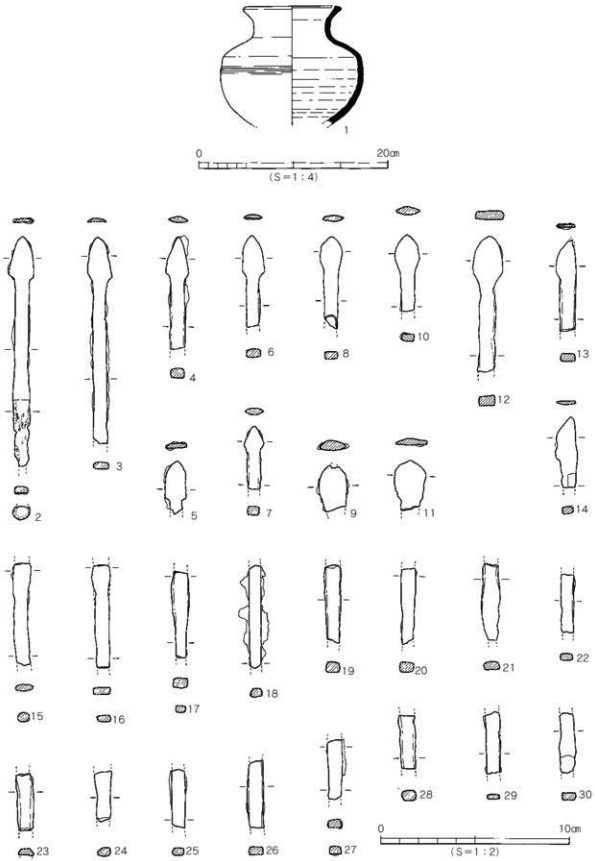
鉄斧（53）　鍛造の袋状鉄斧、無肩の形態である。錆膨れのため袋部の合わせ目は判然としない。袋部の横断面形状は楕円形である。全長10.6cm、刃幅4.2cm、重量189.4ｇを量る。

鑿（54）　基部断面楕円形の中実の鉄棒の中位より先を断面長方形に成形し、端部に両刃の刃付けを行っている。全長9.3cm、刃幅1.2cm、重量24.7ｇ。

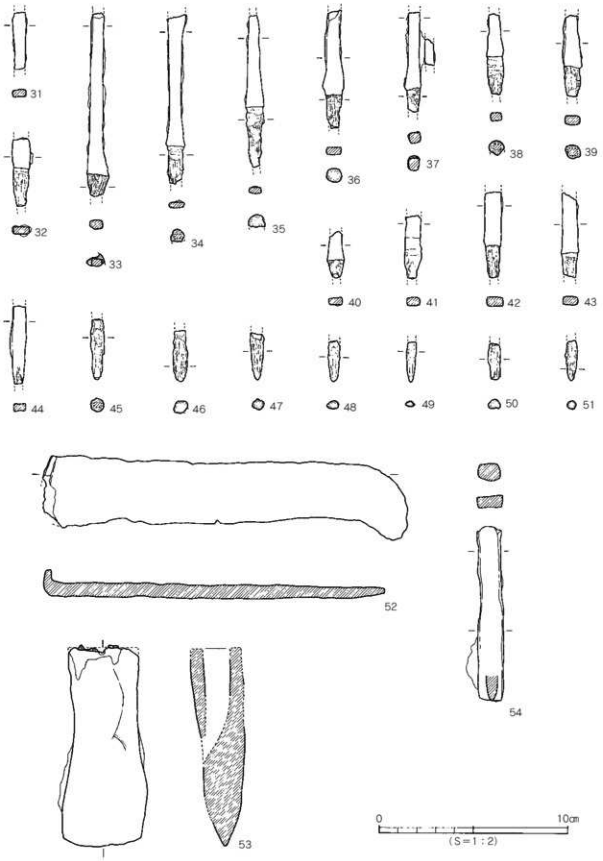
馬　具

楕円形鏡板付轡（55）　長さ12.3cm、最大幅8.8cmの鉄製鏡板の外側で銜と引手が連結する。立聞はこれを欠くため不詳である。銜は長さともに9.8cmの２本を連結させ、鏡板中央の長方形孔に銜先環を通し、銜留金具で鏡板に取り付けられる。引手には14.7cm、12.3cmと長短がある。

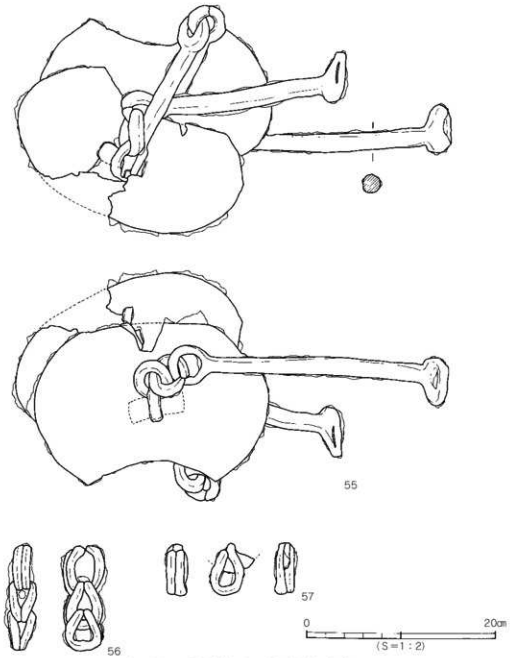
兵庫鎖（56・57）　引手に連結していたものであろうか、３連の56と１個体のみの57がある。



第６図　１号墳横穴式石室出土遺物（１）



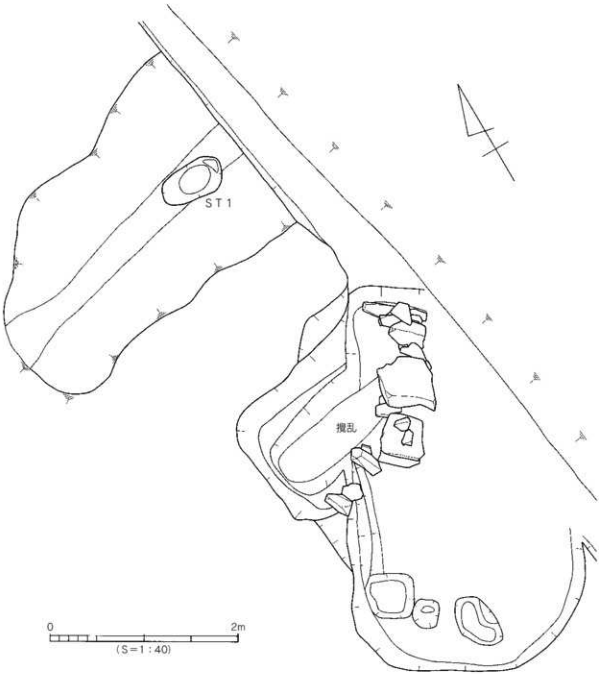
第７図　１号墳横穴式石室出土遺物（２）



第８図　１号墳横穴式石室出土遺物（３）

d．周　溝（第９図）

主体部北方の直近で周溝と思われる溝が検出されている。北東～南西主軸の石室墓壙の北西隅からが最も近く、１ｍの距離しかない。検出されたのは、東西方向に3.2ｍ程度の範囲でその西端は丘陵傾斜に倣い収束する。図のように主体部に最も近い検出東端で現況の最大幅を測り、その幅はおよそ２ｍとなっている。これより東は隣地に及んでいるため未調査であるが、石室奥壁側の丘陵高所のみを馬蹄形状に掘削したものと思われ、溝の内法での差し渡し８ｍ内外の規模で墳丘を形成していたものと考えられる。なお、この周溝底で、この古墳に先行する古墳時代前期、幼児骨を埋葬した土坑墓が１基検出されている。これについては別項で詳述する。



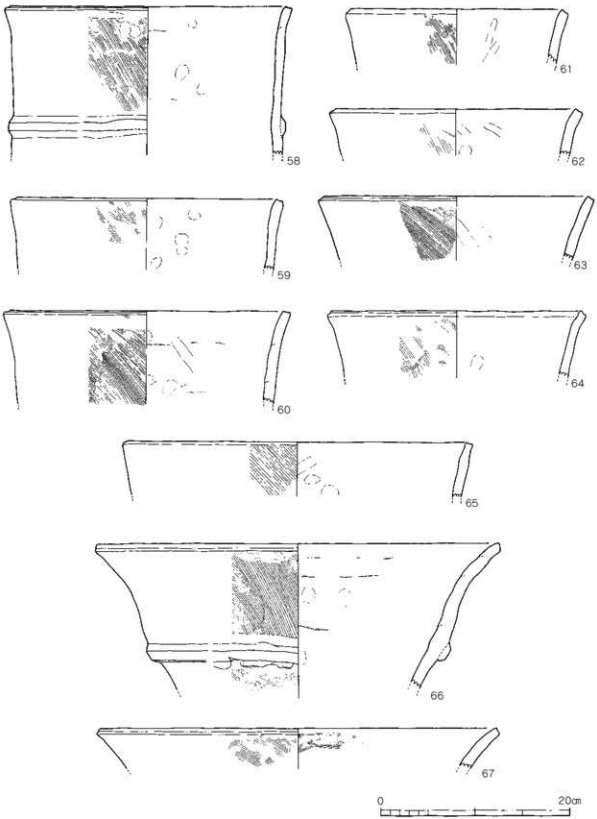
第９図　１号墳横穴式石室と周溝

ｅ．埴輪散布地点ＳＸ１（第３図）

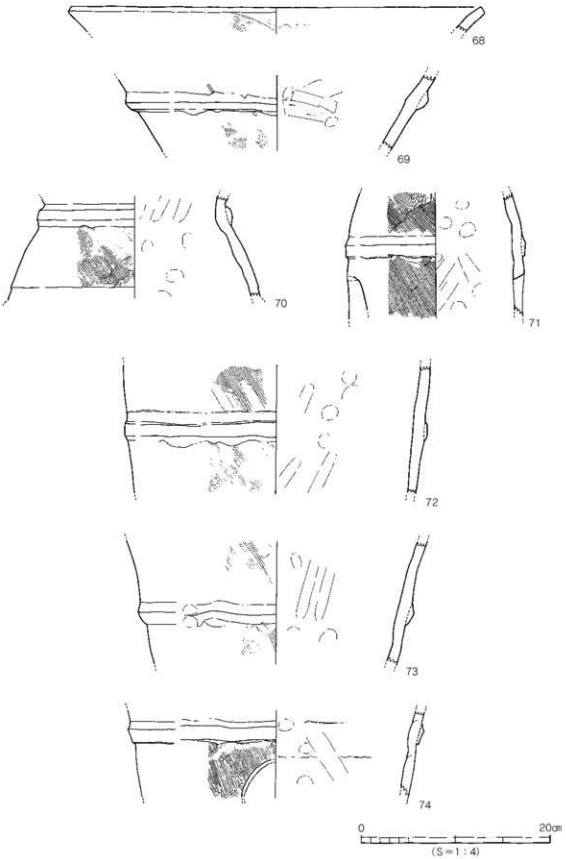
上記の周溝西端から北西におよそ３～４ｍ離れた斜面で、東西６ｍ、南北3.5ｍ程度の範囲に埴輪が散らばった状況で分布しているのが検出された。墳丘から転落して斜面堆積したものと考えられるので、１号墳に伴う埴輪として扱う。

ＳＸ１出土遺物（第10～13図）

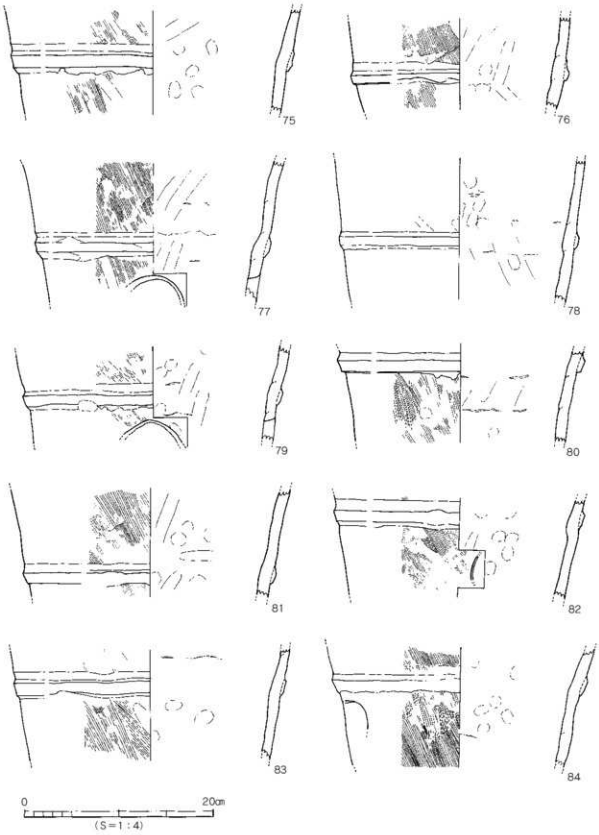
埴　輪



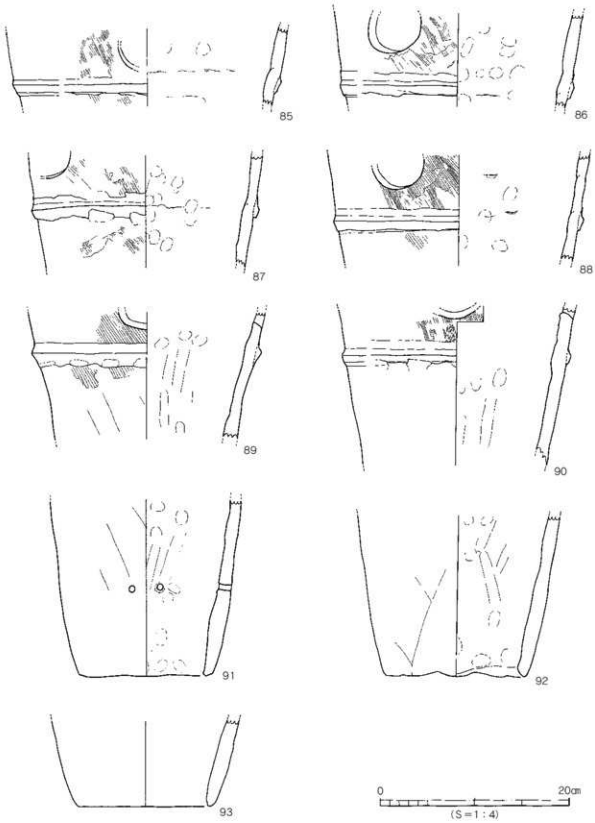
第10図　ＳＸ１出土遺物（１）



第11図　ＳＸ１出土遺物（２）



第12図　ＳＸ１出土遺物（３）

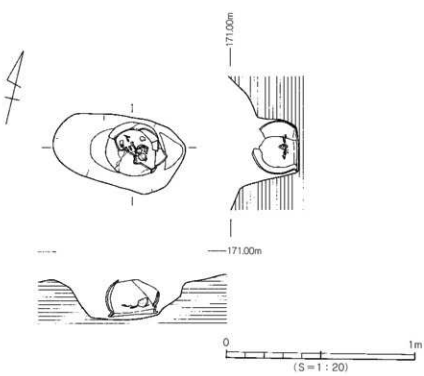


第13図　ＳＸ１出土遺物（４）

円筒・朝顔形埴輪（58～93）　口縁部の遺存により円筒とわかるものは58～64の８個体、口頸部や肩部の遺存により朝顔と判定できるものは66～71の６点である。小破片を図化しているものもあるため、円筒の口径は最大で35.6cm、最小で22.2cmとややはずれた数値を示すものもあるが、概ね25～29cmの範囲におさまるものが多い。口端はやや外斜し、横撫でによる僅かな窪みを持つ。外面は一次調整のみで、右下がりの斜め刷毛目を施される。口端部直近のみ横撫でされるが、強い撫でではない。須恵質の焼成となっているものが目立つ程度に存在する。朝顔の口縁部は69にみられるように、ラッパ状に開いた口縁外面の中ほどに低い突帯を貼りつけるもので、肩部の張りは弱い。胴部に貼られる突帯も低平な蒲鉾形もしくは、横撫でによる浅い窪みを持つ低いM字形で、ヘラ状工具を用いた押圧技法で貼り付けられるものもある。底部調整は外面板押えで行われていることが89～92でわかる。なお、須恵質の91には直径0.5cmの棒状工具による焼成前穿孔が外面より行われている。

ｆ．土坑墓ＳＴ１（第14図）

１号墳周溝底でこの周溝に切られた状況で検出された。検出面でのプランが65×35cmの楕円形の墓で、長軸は東西方向である。現況で深さ25～30cmであるが、周溝の肩となっている地山面から坑底まで約80cmあるので、本来、これを凌ぐ深さの穴であったものである。現状での断面形は擂鉢状に近く、土師器鉢が伏せた状態で置かれていた。穴はこの伏せた鉢の口縁部がほぼ底面一杯となるような掘り方である。周溝によって切られた際に鉢の底部～胴下半の一部が破損していた。被葬者は乳児または嬰児で、骨は土坑床面から５cm程度浮いた位置で検出された。痕跡は残っていなかったが、鉢の口径よりも小さめでやや厚みのある有機質のものの上、あるいは布のようなものに幾重にもくるまれたうえで鉢を被せられて埋葬されたものと思われる。

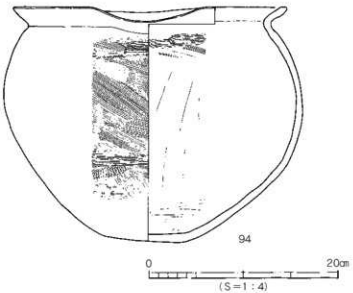


第14図　ＳＴ１測量図

ＳＴ１出土遺物（第15図）

土師器

鉢（94）　埋葬に用いられた鉢である。器高24.9cm、口径28.3cm、胴部最大径31.7cmと胴部径が口径を僅かに上回っている。丸底に近い凸レンズ状の平底に、張りを中位よりやや上に持った胴部、強く折り曲げられた頸部から短めの口縁部が開き、片口状に成形される。口端部は上面に曖昧な平坦面を持っている。胴部外面および内面の頸部に近い部分を目の細かい刷毛目で調整されている。



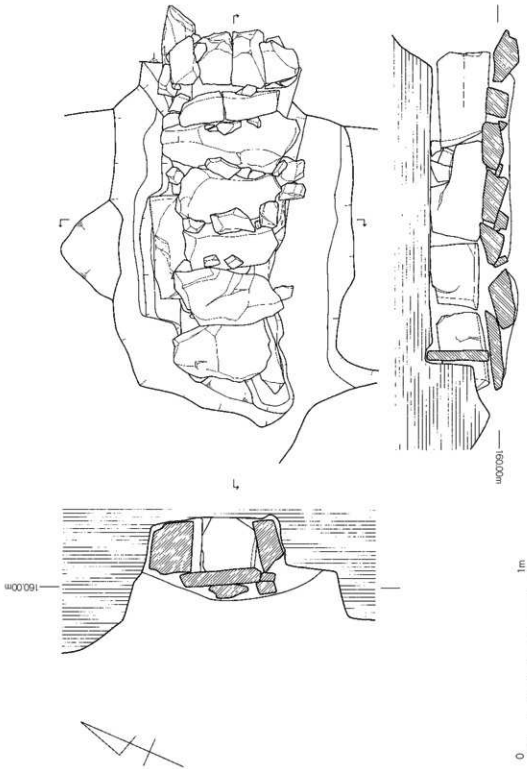
第15図　ＳＴ１出土遺物

（２）２号墳の調査

ａ．主体部（第16・17図）

三味線山古墳発見の契機となった埋葬施設である。隣地との境に掘られた排水溝によって既に一部破壊され、箱式石棺の小口部分が露出していたものである。後にこの小口は被葬者頭部側と判明することになるが、小口石材は抜かれていてこの小口から石棺内部が覗ける状態であった。石棺石材には花崗岩地帯であるこの丘陵で比較的容易に調達できる花崗岩が用いられている。ちなみに１号墳に僅かに残された側壁石材も花崗岩であった。主軸を東西方向に持ち、現況はそれぞれ４枚ずつの石材で設けられた南北の側壁と、これら側壁西端の石材に挟み込まれるかたちの足元側小口板で構成された棺身に蓋石が架けられた状態である。蓋石は横長の石材を６枚横架し、それぞれの間隙を角礫によって塞いでいる。最も東の蓋石は本来１個の横長の石材が主軸方向に平行に４枚に割れたものであるが、石棺内に落ち込んではいない。この状況からすると、抜かれた小口石材はこの蓋石の下にあって割れたこの天井石材を支えていたものと思われる。墳丘封土は削平されて遺存していなかったが、主体部天井を覆う粘土は第17図のように、最大厚５cm程度で部分的に遺存していた。

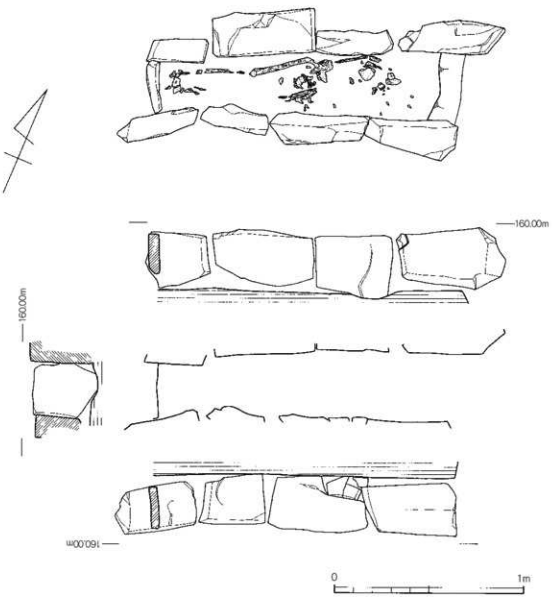
石棺は、幅1.3m程度の不整長方形の墓壙中に設けられている。掘削面からの深さは55cm程度であるが、その深さの中位にテラス状の部分を持つ段掘りとなっている。壁体石材は、このテラスの内側



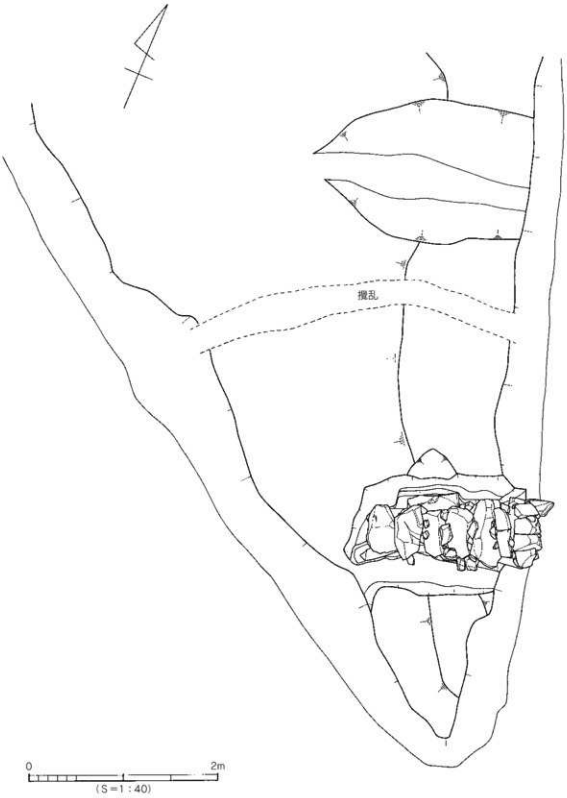
第16図　2号横穴式石室測量図

の掘り方一杯に据えられている。掘り方は、使用石材の大きさ・形状に応じた出入りのあるプランとして掘られ、石棺壁面内面を揃えるように調整されている。四周の壁体上端は概ね墓壙テラスの高さに揃えられ、この上に蓋石が載っているが、テラスの面に蓋が載るようなことはない。
床面に石敷き等の施設はなく、被葬者は地山面に直接安置されている。頭部側小口石材抜き取りの際にこの部分の床面も削られており、現状で生きている床面長は148cmとなっているが、側壁との関係からするとこれで本来の長さに近く、155cm程度の内法長であったものと考えられる。幅は足元側で25～30cm、頭部側で35cm、高さは27cmである。棺内、棺外いずれからも遺物の出土はない。

石棺内床面には１体の被葬者が安置されている。東が頭部側で西が足部側、附編において詳述されるように成年男子と分析されている。



第17図　２号墳箱式石棺展開図および人骨出土状況図



第18図　2号墳全測図

b．墳丘・周溝（第18図）

古墳は、調査地南端近くの稜線上にあるが、墳丘西および南側の大半は既設の市道造成時に削り取られ、また東半は隣接地となっているため未調査で終わっている。唯一、２号墳に伴う遺構として検出されたのが、主体部北方2.5mの東西方向の溝である。現況での最大幅1.6mで長さ2.2m分を検出した。現況では直線的に東西に走り、溝の西端は自然消滅、東は隣地に及んでいる。墳形や詳細な規模は不明であるが、溝との間隔を主体部主軸ラインで折り返すと差し渡し６m程度の規模となるので、おそらくはその程度の規模の墳丘であったものと思われる。なお、溝からの遺物の出土はない。

第５節　まとめ

道後平野東部の南西に開けた丘陵の西斜面において、それぞれ形態の異なる３基の埋葬施設が調査された。横穴式石室を主体部とする１号墳は、墳丘、石室ともに壊滅状態ではあったが、おおよそ８m規模の小型の墳丘であったと推定した。原位置を留めてはいないが、墳丘には円筒・朝顔形の埴輪を伴っている。石室も床面だけの部分的な遺存であったが、玄室規模2.2×1.2m程度の小型の石室であることがわかっている。副葬土器はほとんど遺存していない一方、馬具・工具をはじめとする鉄製品が比較的多く出土した。中でも鉄製楕円形鏡板付轡が目立った存在である。松山市域では、北斎院町所在の５世紀末の茶臼山古墳に次ぐ２例目の資料である。鏡板の抉りなど形態にやや差はあるが、縁金銅留など装飾を伴わない簡素なつくりで、兵庫鎖を伴うところなどは共通している。人骨側からの所見によれば、一体の追葬が想定されている。ＳＸ１出土の埴輪がこの古墳に伴うと考えているので、築造時期はこの埴輪の時期と考えてよい。上述の轡ともあわせて考えると、６世紀後半でも中頃に近い時期の築造と考えておきたい。この１号墳周溝に切られた状態で、前期初頭の乳児埋葬ＳＴ１が検出された。素掘りの土坑内に遺骸を安置し、大型の鉢を逆位で被せるスタイルのものである。弥生時代以降、合わせ口の壺を正位もしくは横位ないし斜位にとるのが伊予の一般的な例で、このような例は初例、加えて古墳時代の土器棺そのものの検出例も乏しい。逆位の土器棺という葬法をとった理由はどこにあるのか、死亡原因がからんでの葬法であるのかどうかはわからないが、少なくともこの例は残存人骨の形質学的な分析からいって、胞衣の処理や死産というようなものではないことは明らかである。人骨の残存状況から、今後、法医学・病理学的な分析が可能であれば、ある程度の答えを期待できるかもしれない。

２号墳は、差し渡し６m規模の小規模な墳丘に伴う単体埋葬の箱式石棺であった。第１章で述べた瀬戸風峠古墳群同様年代の決め手を欠くが、古墳時代前期からこの丘陵上で墓が営まれていることはＳＴ１の乳児埋葬の存在から明らかであるので、墳丘を持つ石棺であることを考えると、これと同じ頃もしくはこれ以降の少なくとも１号墳よりは先行する時期のものと考えておきたい。

文　献

坂本美夫『馬具』ニューサイエンス社 1985
菊池　実「甕棺葬」『縄文文化の研究 9』雄山閣 1983
馬目順一「幼児用の壺・甕棺墓」『弥生文化の研究 8』雄山閣 1987
山内英樹「伊予の埴輪編年」『紀要愛媛第８号』愛媛県埋蔵文化財調査センター 2008

第３章　船ヶ谷向山古墳

第１節　調査に至る経緯

1987（昭和62）年12月、宗教法人霊法会 代表役員 吉岡次秀氏より、松山市船ヶ谷町所在の丘陵上における教団講堂建築に伴う埋蔵文化財確認願が松山市教育委員会文化教育課（以下、「文化教育課」）に提出された。丘陵は大山寺山塊南東麓にあたり、周知の包蔵地「№17 東山町古墳群」の一角に該当する位置にある。申請を受けた文化教育課は、同月29日に試掘調査を実施した。その結果、多量の埴輪片の出土とともに、原位置を留めた埴輪列の一部が検出された。このため、建設予定地が古墳のマウンドそのものにあたると判断され、霊法会と文化教育課との間で遺跡の取り扱いに関する協議が持たれた。その結果、霊法会の協力のもと、緊急発掘調査を実施することとなった。調査は、翌1988（昭和63）年６月１日より開始され、およそ１か月を調査期間として行った。

第19図　調査地位置図（S＝1：5,000）

第２節　調査組織

松山市教育委員会　教育長　平井　亀雄
　　文化教育課　課　　長　渡部　忠平
　　課長補佐　大野　衛治
　　第二係長　菅野　浩之
　　主　　任　西尾　幸則
　　調査員　宮崎　泰好
　　池田　　学

調査地　愛媛県松山市船ヶ谷町乙45番６、46番９、47番２、50番、51番１・２、52番、53番、
　　甲139番３、152～155番、155番２、170番３
調査期間　1988（昭和63）年６月１日～７月１日
調査面積　4,135.33㎡

第３節　遺構と遺物

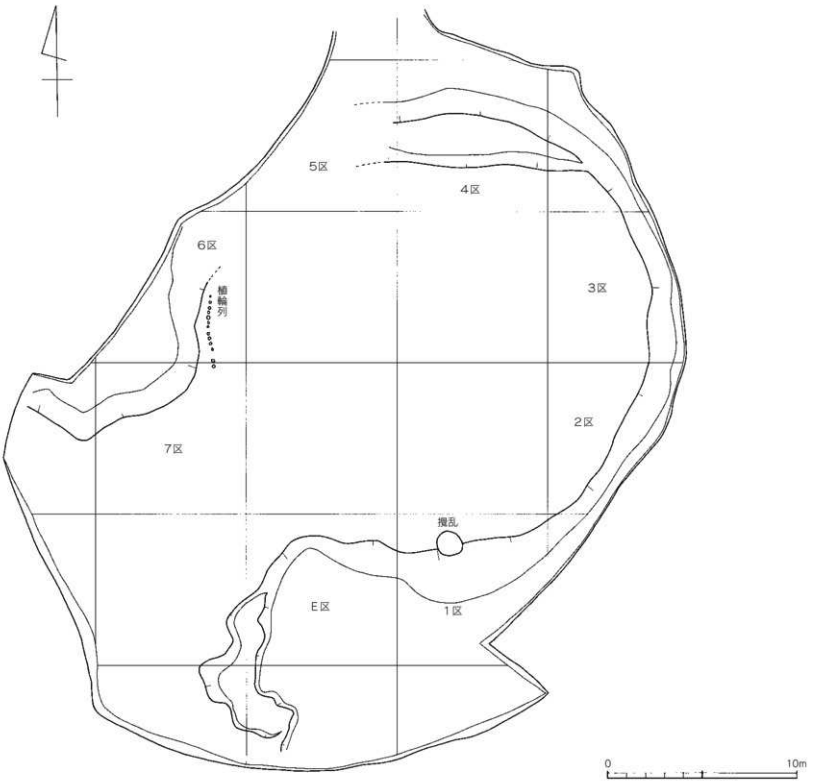
（１）墳　丘（第20・21図）

古墳は大山寺山塊南東麓にあって、南西から北東に延びる稜線の端部付近に位置する。標高は29～31m、果樹園であったが、調査時点では稜線部分を削られた耕作放棄地となっていた。このため、僅かに残った表土を撤去すると、地山面である黄色シルトがすぐに姿を現すといった具合で、部分的に盛土が残っているものの、主体部を含め大きく削平されているのが現状であった。僅かに盛土が遺存している墳丘北西端付近では円筒埴輪列が検出されている。その他の部分の墳丘の周囲には、地山よりもやや暗い暗黄褐色のシルトが溜まっており、この土から須恵器や埴輪の破片が出土した。調査は墳丘を８ｍグリッドで割り、第21図のようなグリッド名称で遺物の採り上げを行っている。墳丘直径は約26mの円形を呈するが全周はせず、北西の７区と南東のＥ区で途切れ、くびれ状に開く形態をなしているので、全長32m程度の帆立貝形の前方後円形となる可能性が高い。ただ、推定前方部は耕作による削平や農道造成による破壊が進んでおり、その端部の検出にまでは至らなかった。また７区の墳丘肩部では立った状態の埴輪列が検出されている。このような出土状況、および墳丘形態を勘案して、出土遺物については、古墳に伴うと考えられるものを、くびれ部となる可能性が高いＥ区、７区、および６～７区埴輪列とその他の墳裾部に分けて先に扱い、古墳に伴わないその他の遺物について後に一括して取り上げる。

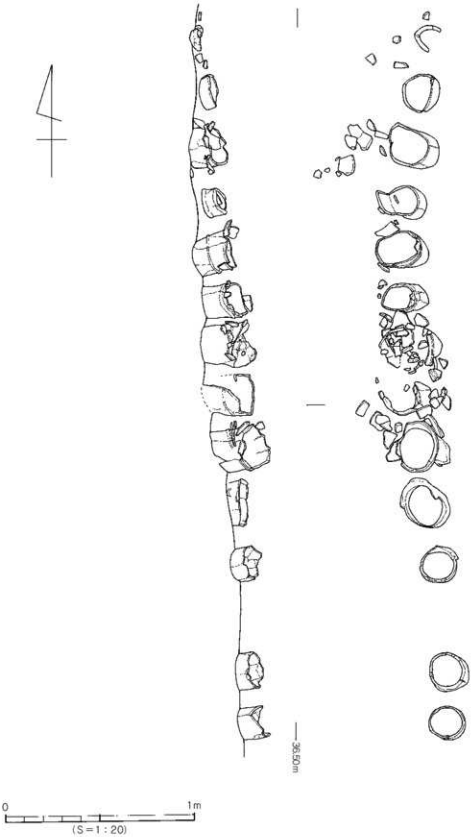
（２）埴輪列と出土埴輪（第22・23図）

６～７区にかけての墳丘肩部において、円筒埴輪底部が長さ3.77mにわたって一列に並んだ状態で

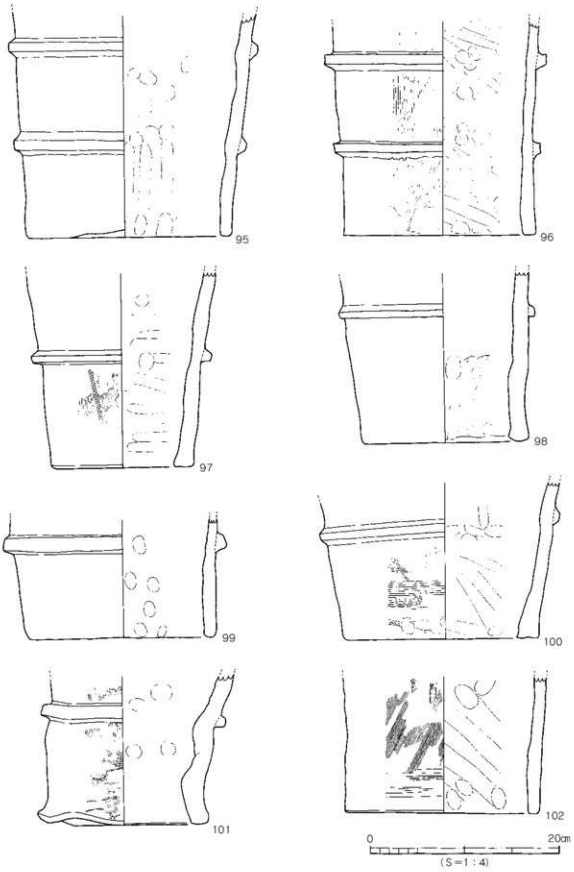
第 20 図　調査後墳丘コンター図



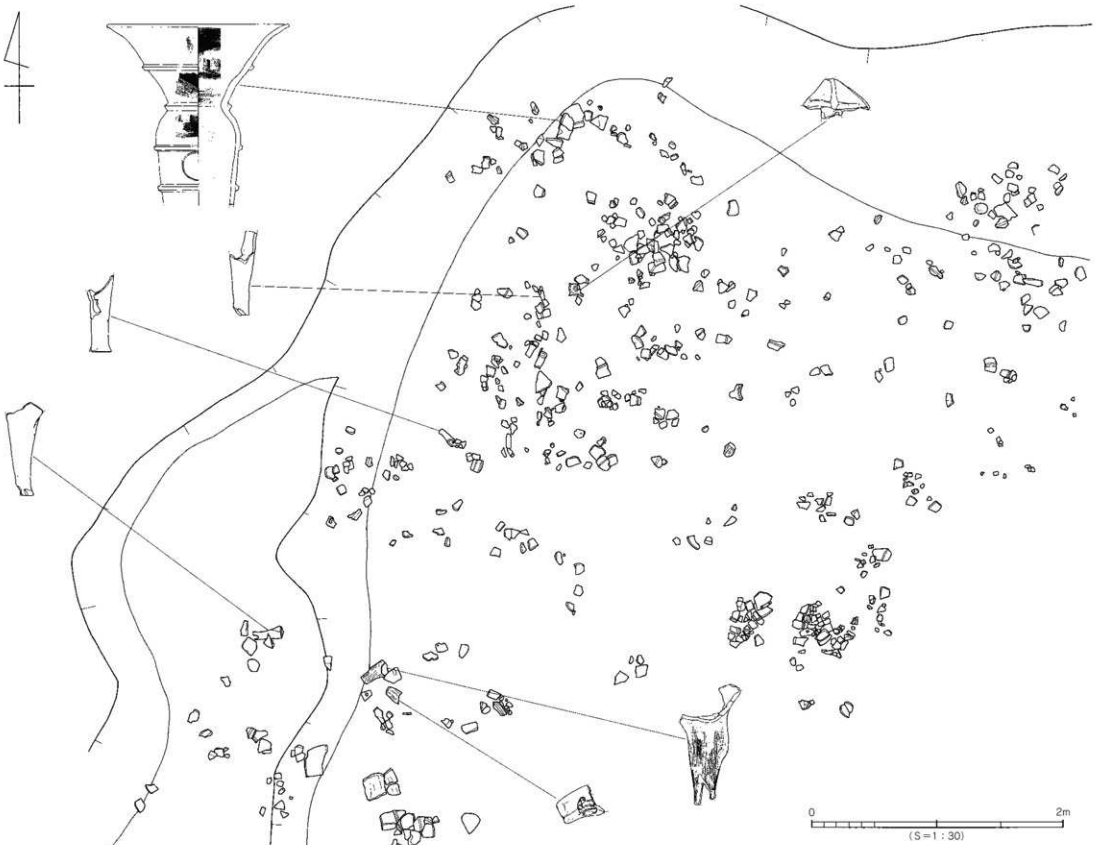
第 21 図　墳丘全測および調査地の区割り図



第 22 図　円筒埴輪列検出状況図



第23図　円筒埴輪列出土遺物



第24図　E区遺物出土状況図

検出されている。墳丘面に掘り方は確認されていないので、墳丘築成過程で配置されたものと考えられる。13個の樹立が確認されたが、現在図示できるのは以下の８個体である。

埴　輪

円筒埴輪（95～102）底部しか出土していないので厳密には円筒とは言いきれないが、一応円筒で扱っておく。底部直径14～21cm程度、底部高８～14.3cm超と近接して列をなしていたわりには器形にバラツキがある。突帯断面形状は比較的高い台形、もしくは中窪みの台形である。底部調整は内外面指ナデまたは指オサエによるものと、外面に刷毛目を施すものとがある。96は須恵質に焼成されている。

（３）各調査区の出土遺物

ａ．Ｅ区出土遺物（第25～40図）

須恵器

坏・高坏（103～128）　小破片が多く、坏と有蓋高坏の区別がつきにくいので、一括して扱う。蓋は天井部と口縁部境に稜をもつもので、残りのよい103や104では、天井部外面のおおよそ3／4をヘラケズリされている。稜はさほど高くなく、口端部は斜めに傾いたやや窪んだ面なすか、あるいは段を持つものもある。蓋のつまみは中窪みの比較的大きめのものであるが、112のみが小さく窪みも浅い。身の立ち上がりはやや内傾、端部は蓋の口端部同様の処理を施されている。有蓋高坏は短脚で、全形を知ることができる121・122の透かしは長方形、三方となっている。121はやや大型で脚も長めであるが、122はまた極端に脚が短い。これら長方形透かしのものに比べると、127は脚柱部がやや細く、裾近くの三方に直径８㎜の円孔を持つ。128もやや細身の脚柱部と大きく開く裾部を持つもので、裾部の外面に突帯が１条巡っている。

把手付椀（129）　把手付椀の把手下端部分。断面形は1.4×1.7cmの楕円形である。

甕（130～139）　外反して大きく開く口頸部形態のものには130～133のような無文のものと、134～138のような櫛描波状文を持つものがある。前者の口端部は、上方または上下方に端部を拡張して、その直下に断面三角形の突帯を持つ。後者の口端部も同様で、細く鋭い突帯で区画された施文帯に櫛描波状文が施される。139は外上方に比較的短く口縁部が直線的に開くもので、口端部は平坦な面を上方に持つ。胴部外面は大きめの浅い格子叩き、内面は細かい同心円文をナデ消している。

器台（140～142）　いずれも脚部、２本沈線で区画した施文帯に櫛描波状文を施すもの。透かしは長方形と三角形を組み合わせる。

土師器

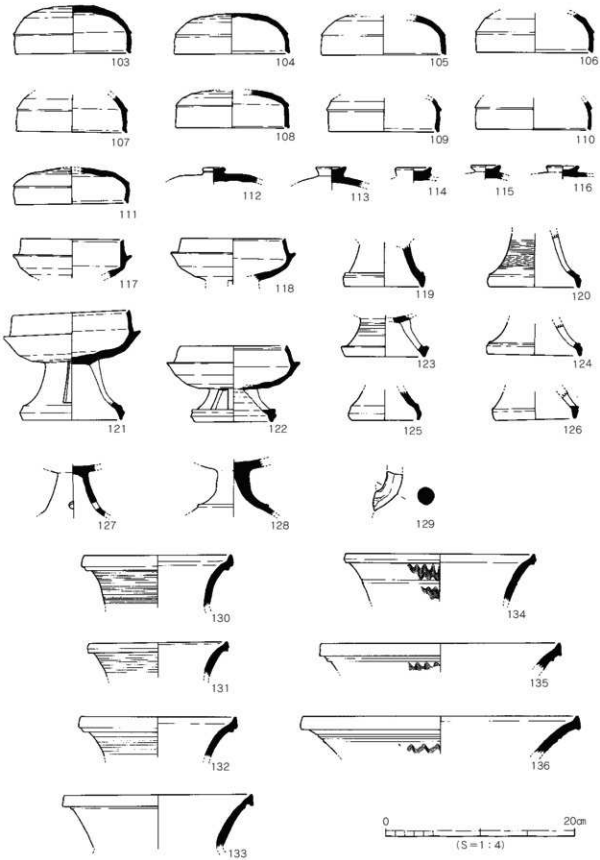
甑（143）　中実の把手片。

土製品

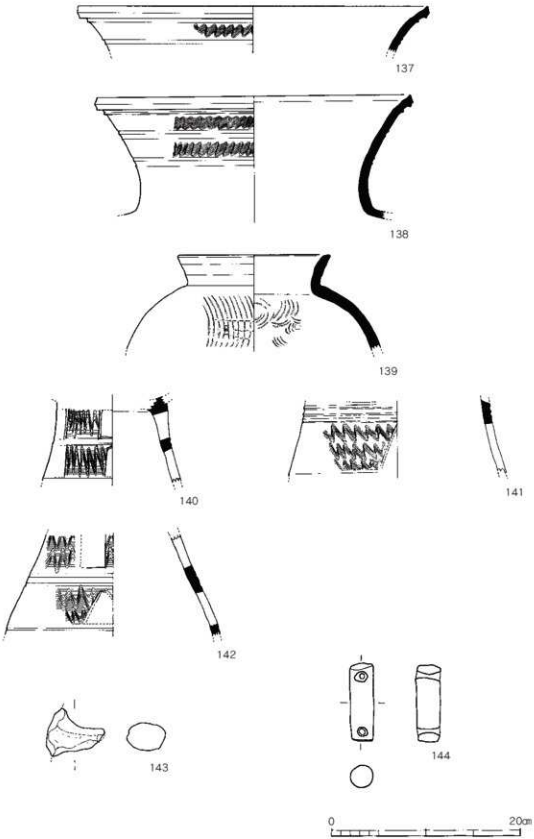
土錘（144）　直径２～2.5cm、長さおよそ８cmの棒状土錘。両端に直径７～８㎜の円孔を施されている。重さ60.9ｇを量る。

埴　輪

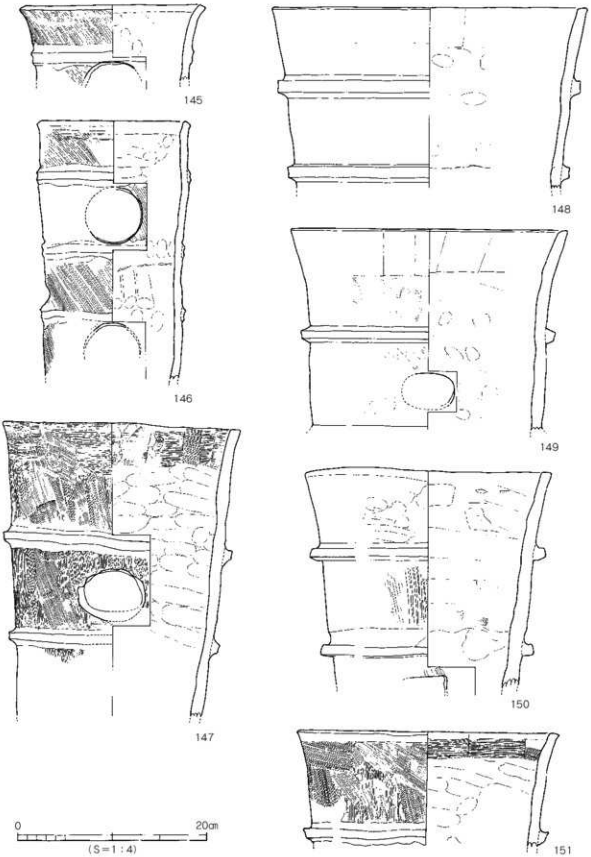
円筒・朝顔形埴輪（145～205）　円筒と判別できるものに145～165と200～203、朝顔と特定できるものに166～170がある。200～203は線刻を持っているので普通円筒とは区別して掲載している。円筒埴輪は後述する胴部や底部でも確認できるとおり、規格には大中小の３通りが存在しているようで、145・146のような口径20cm程度のもの、148に代表されるような口径30cm前後のもの、そしてその中間くらい



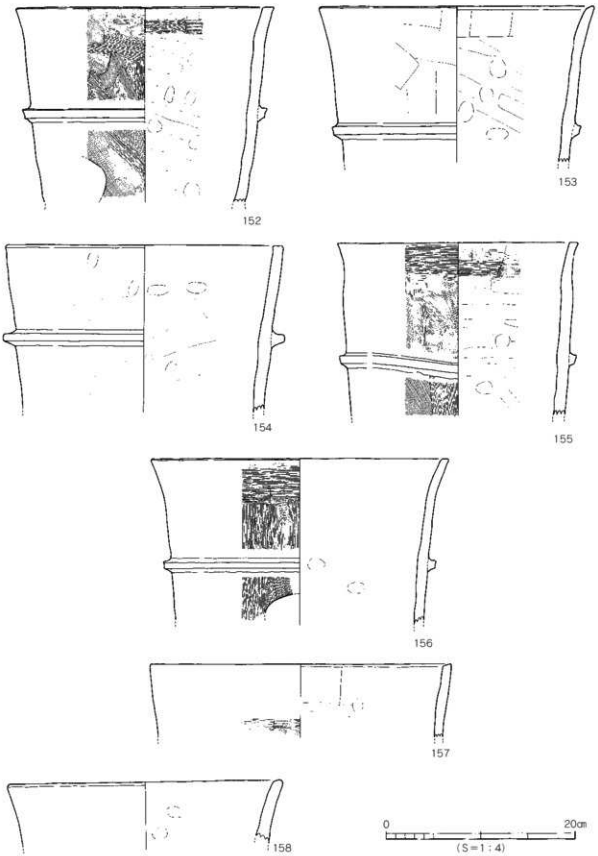
第25図　E区出土遺物（1）



第26図　E区出土遺物（2）

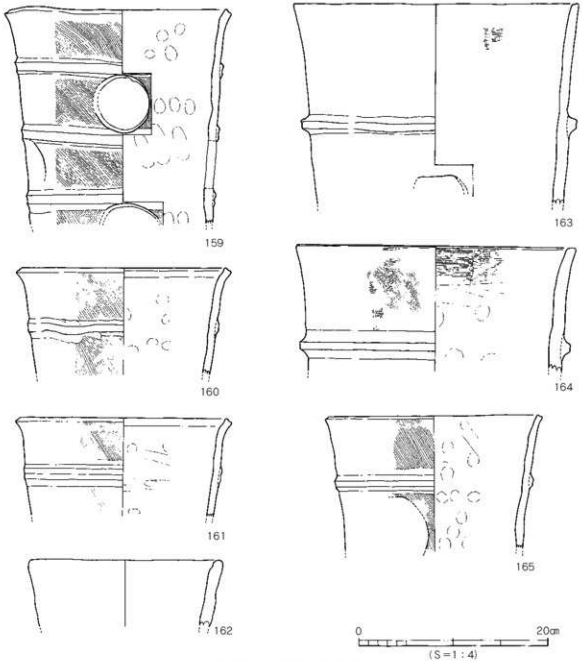


第27図　E区出土遺物（3）

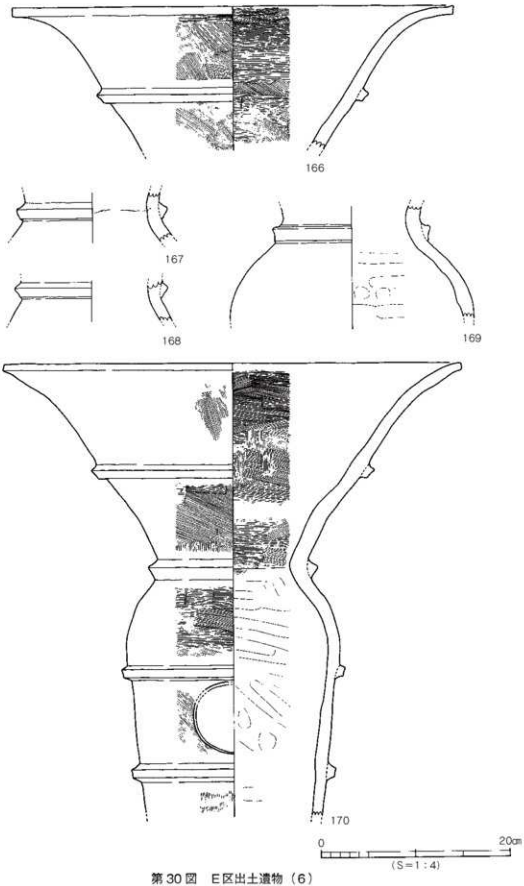


第28図　E区出土遺物（4）

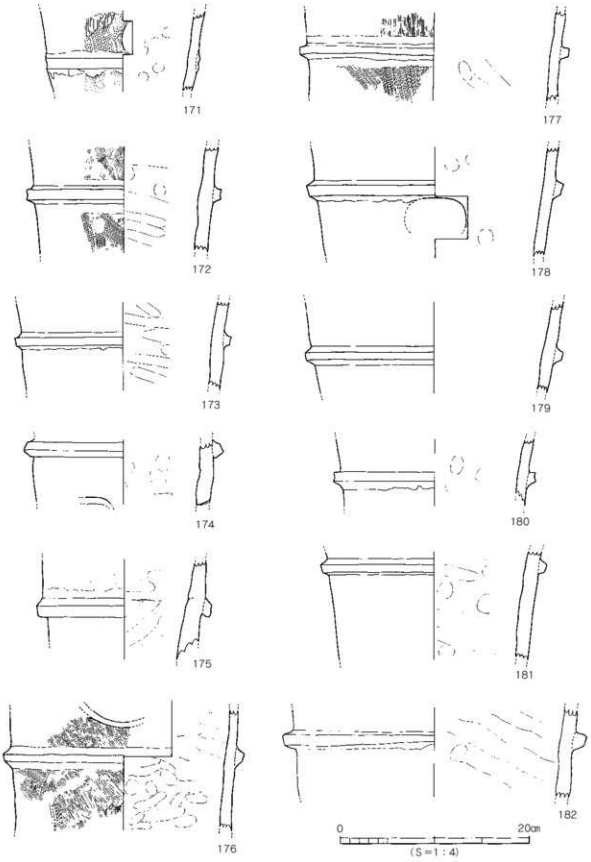
のサイズ、口径25cm程度のものがある。小さなものを146の口～胴部と190の胴～底部を合わせてみると、４条の突帯により５段に区画され、最上段、最下段を除いた３区画に円孔が直交配置で施されているようで、このことは７区出土の復元完形品数点で確認できる。その他のサイズのものではなかなか確認はできないが、おそらく同様にこの規格で製作されているものと思われる。145～157は須恵質に焼成されているもので、口縁部だけをとってみても須恵質のものが一定量あることがわかる。小型のものには低いM字形突帯が貼られることが多く、また円孔は区画の上下一杯に施されるのが特徴である。その他のものの突帯は比較的高い台形または方形である。外面の器面調整は縦、斜めの刷毛目を用いた一次調整のみのものと、ナデられるものとがある。口縁部内面にB種ヨコハケを施されるものも存在する。



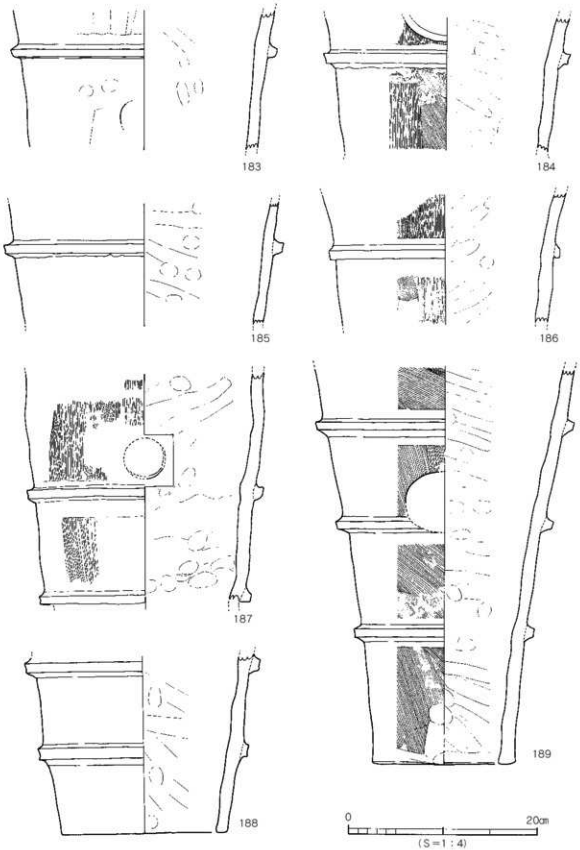
第29図　E区出土遺物（5）



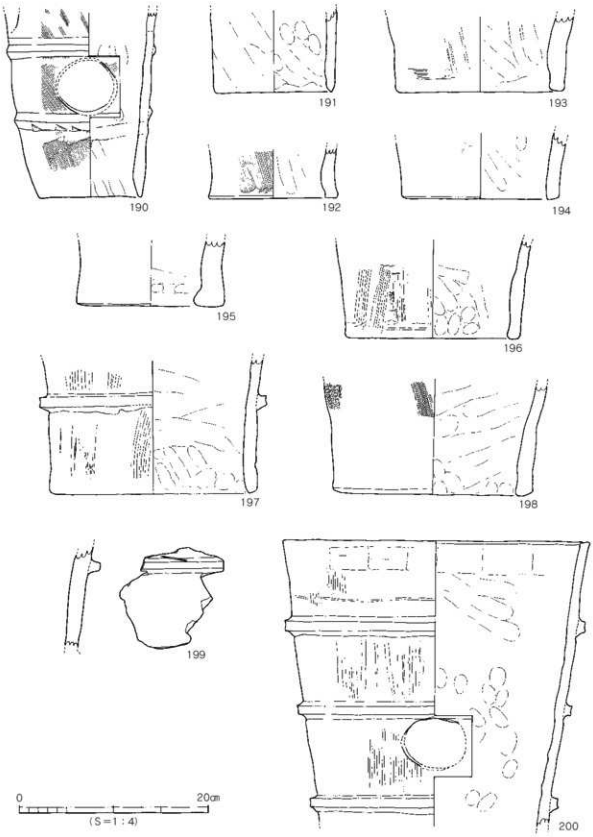
第30図　E区出土遺物（6）



第31図　E区出土遺物（7）



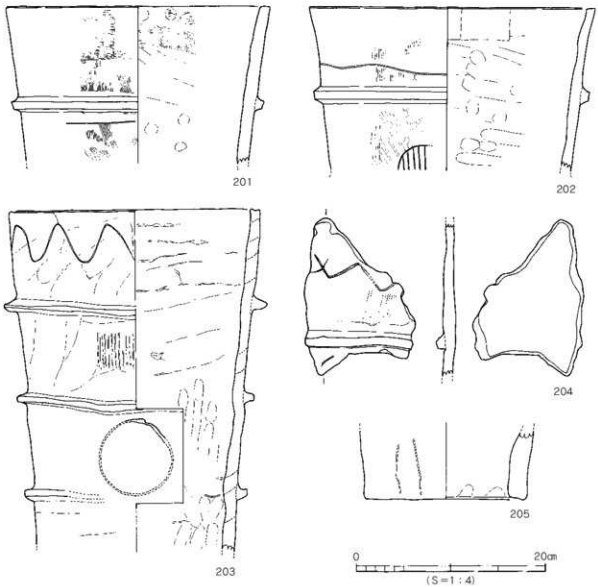
第32図　E区出土遺物（8）



第33図　E区出土遺物（9）

朝顔形埴輪のうち遺存の最も良好な170でみてみると、張りの弱い肩部を介して頸部に断面三角形の突帯が巡り、この頸部から口縁が大きく開く。この個体では口径48.8cmを測る。口縁部外面の中位には断面方形の突帯が１条巡る。胴部は普通円筒の中程度のサイズで、突帯形状、器面調整も普通円筒と同様である。口縁部内面は、横、斜めの刷毛目で調整されるが、およそ外面突帯相当位置より上位は横、以下は斜めを多用するといった傾向がある。底部は、埴輪列でみたのと同様、内外面指オサエ・ナデによるものと外面に刷毛目を用いるもののふたとおりがある。

201～205は外面に線刻を持つものである。201は横方向の直線が最上段突帯の上下の区画に施されている。202は最上段区画に直線とも波線とも つかない横位の一本線、その下の区画に弧線の内側に縦方向の平行線を充填した文様を描かれている。203は最上段に波状の一本線、204の施文区画は不詳であるが、断続的した波状もしくは鋸歯風の線刻がある。底部205には２本の縦位の短平行線がある。



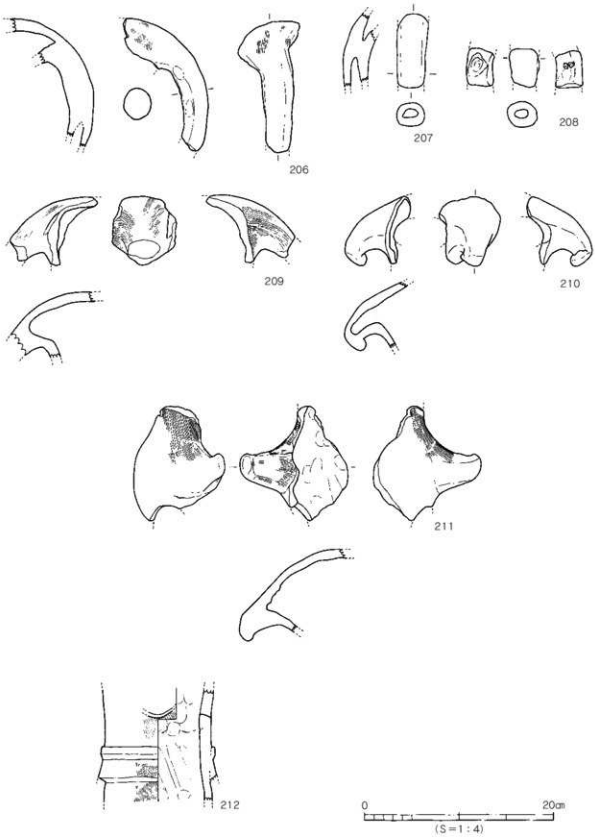
第34図　E区出土遺物（10）

人物埴輪（206～212）　206～211は腕や手と思われるもの、211は体側に下した腕から肩への接合部で、腕の大部分は中実、遺存している下端近くで中空になっているので、この部分より先の直近に手の表現があると考えられる。207・208も同様の腕の破片と考えられる。208は206の下端同様の部分で、手に近い部分である。209は206と同様の腕の付け根、肩との接合部片である。接合部外面の一部に一本線の線刻がある。210・211は同一個体ではないが同様の特徴を持つもの。短く湾曲した先細りの突起で腕を表現したと考えられる。211の体部側には円柱状に立ち上がる部分が続いており、この部分が首になると思われる。また脇のやや背中寄りに円孔透かしがある。この特徴は210でも同様であるが突起の先端部分が折り返され、拳とみられる表現になっている。212は人物の腰部と思われるもので、１条の突帯を持った復元直径11.2cmの円筒の突帯やや下位にスカート状の裾広がりが剥離したと思われる擬口縁がみられる。

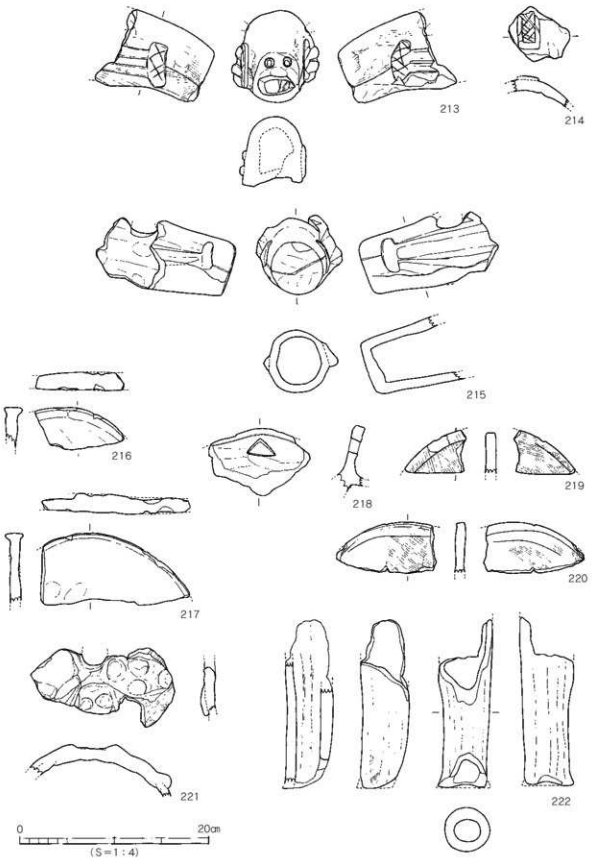
馬形埴輪（213～233）　213～215は頭部片である。213は顔先の片で一枚の粘土板を断面縦長の蒲鉾形に成形して本体部分を作っている。口・鼻先はこうやって成形した本体の一端を粘土板で塞ぐが、下端部を塞がずにそのまま空けた口としている。口は顔側部では１本の線刻によって表現される。鼻は棒状工具をもって穿孔している。線刻による斜格子を刻んだ薄い粘土板を貼って楕円形の鏡板とし、これに続いて面繋の頬革と手綱が２本の突帯で表現されている。破断面には目の切り欠きも確認できる。214は213と焼成が似通っているので同一個体であるかもしれないが、飾り馬の額に近い部分であると思われる。２条の圏線で囲まれた中に、213の鏡板同様斜格子を充填した長方形の薄い粘土板が貼りつけられたもので、額革から垂れ下がる杏葉を表現したものと考えられる。215は顔先の片である。円筒状に成形した粘土板を本体とし、端部を粘土板で塞いで、側面まで回る線刻で口表現を行っている。鼻の表現はない。無文の小さな楕円形粘土板で鏡板を、これに続く２本の突帯は頬革と手綱である。頬革の突帯に接するように切り取られた目は楕円形に近い形になるものと思われる。

216・217は鬣（たてがみ）である。色調や焼成はどちらも215に似てややオレンジがかった色調の軟質な焼成となっている。一辺が弧状の形態の粘土板の弧の辺を拡張して、断面Ｔ字状に成形するものである。218～220は鞍と考えられる片である。218は後輪かと思われるもので三角形に切り取られた透かしを持っている。座面側の縁辺近くに縁取りのような細い沈線が巡る。裏側は器面の剥離により沈線の有無は確認できない。219・220はやはり輪の破片と考えられるもので、これらの表裏には細沈線の縁取りがみられる。221は尻近く、背の胴部片、数個の半球状の突起は杏葉など飾り金具を表現したものであろう。直径２cm程の円孔の存在が確認できる。

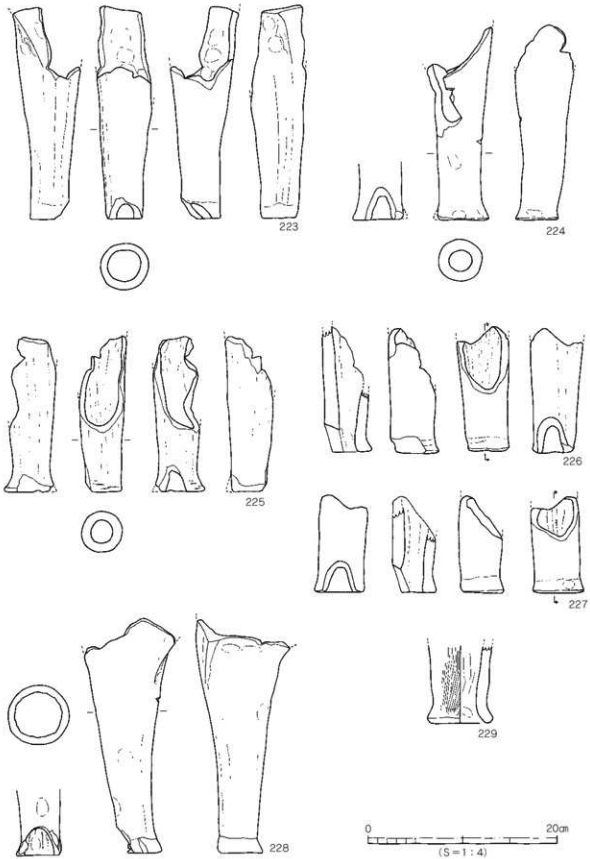
222～231は脚である。先細りの中空円筒の端部外面に粘土を加え拡張して蹄を表現し、端部の２/３程を斜めにそぎ取るように切り欠き、脚端後側を表現している。222～228は頭部215に似たオレンジ色の軟質な焼成で、およそサイズも揃っている。付け根近くまで残っていて右前脚と考えられる228でみてみると、およそ脚高25cm、蹄直径５cm、大腿部径10cm程度の法量である。器表面は丁寧に撫でられ、器壁は薄いつくりとなっている。229・230はこれらとは異なり器壁は厚めで、器表面にハケ目が残り、比較的硬質の赤みを帯びた乳白色に焼成されているもので、頭部213に似た色調・焼成となっている。230の脚端部には他の脚同様の切り欠きがある。229は破片のため切り欠きの有無は不明である。231は右後脚で、大腿部の張りまで写実的に表現しており、他の脚とは異質なものである。胴部との接合部までの脚高は24.0cmとおおよそ他のものと同じで、蹄の切り欠きを持つところも共通している。外面にはハケ目が残り、胴部との接合部下面には指ナデが顕著に残る。薄いオレンジ色の硬質な焼成となっている。232はこの231と同様の色調・焼成になるもので、胴部のいずれかの部位の破片と考えられる。直径2.5cmの円



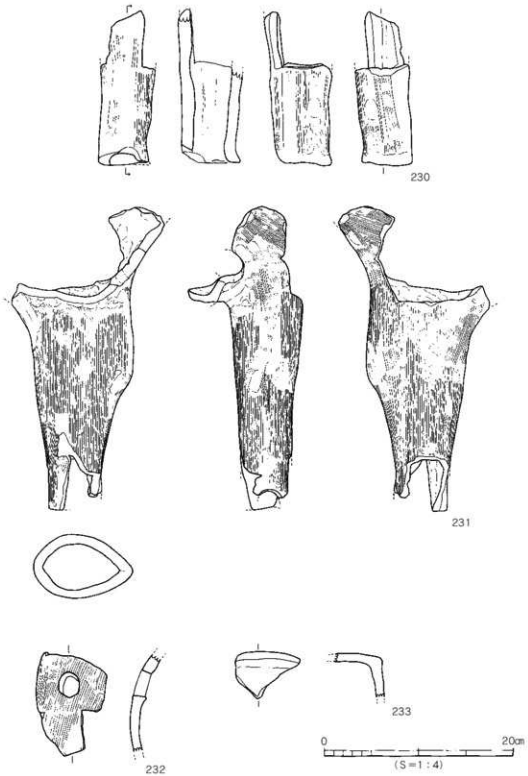
第35図　E区出土遺物（11）



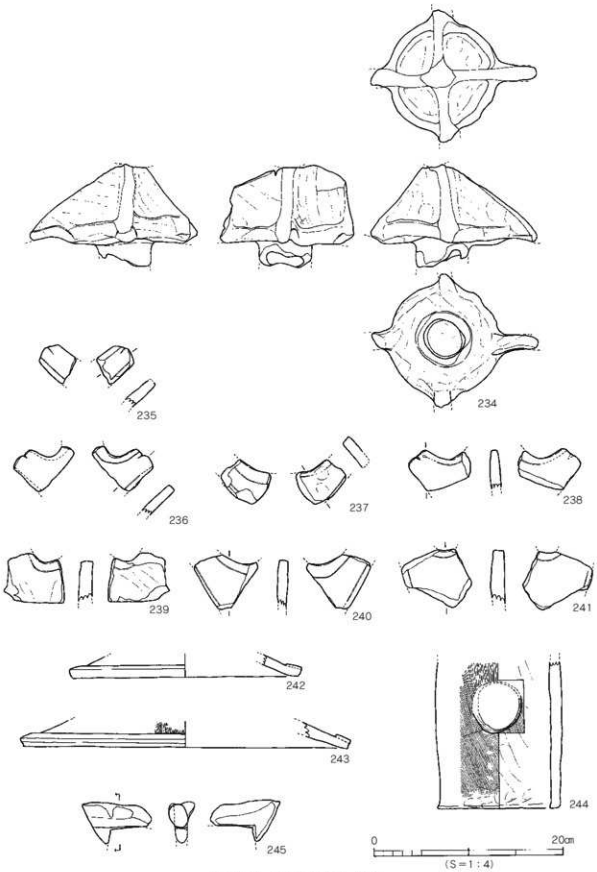
第36図　E区出土遺物（12）



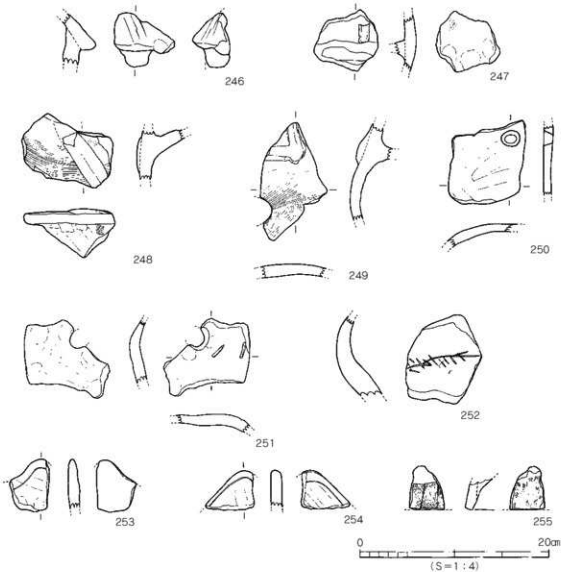
第37図　E区出土遺物（13）



第38図　E区出土遺物（14）



第39図　E区出土遺物（15）



第40図　E区出土遺物（16）

孔を切り取られている。233は222～228と同様の焼成になるもので、脚部と胴部の接合部の破片である。

蓋形埴輪（234～244）　234～241は立飾りの片である。234は基部、4方向に開く飾り板のほとんどと挿入軸部を欠いている。軸部の直径5.3cm、飾り板下端辺は緩やかな弧を描きながら横方向に延びている。この下端辺から1cm程度の部位に1条の細沈線が、弧のカーブにならって施されている。その他は飾り板の破片で、いずれも両面の縁辺部に細沈線が施されている。242・243は笠部の片、小破片のため直径にはやや不安があるが、端部上面に幅1.5cm程度の薄い肥厚帯がある。無文で、243の器表面はハケ目調整が残っている。244は他の例から蓋の円筒部分と考えられる。突帯を持たない直径12.6cmの小さめの円筒。対向する2個所に円孔を持つ。外面斜めのハケ目、内面には指ナデが顕著である。基底部は指オサエで調整されている。

家形埴輪（245）　窓の切り欠きと思われる部分の片である。

不明形象埴輪（246～255）　246は斜めの平行線3条が確認できるもの、鳥の一部か。247は籠状に

大きく突出した部分に直交して幅1cmの棒状浮文のような粘土帯が貼られているものである。これも鳥の足の部分であろうか。248は椀状に湾曲したパーツに板状のパーツが貼りついたもので、板状部分の器面に幅2cmの薄い粘土帯が貼られているものである。249は僅かな凸面の器表面に幅1cm程度の薄い粘土帯が鉤状に貼られているもので、円孔を持っている。250・251も円孔を持つもの、オレンジ色の焼成で比較的薄いつくりとなっている。馬の一部か。252は壺の頸部のような器形で、短い斜線とこれに交差する不規則な沈線を持つ。253・254は蓋の飾り板に似る施文を持つ板状のものであるが、片面にしか施文されていない。255は平行沈線が端部にまで及ぶ小破片である。

b．7区出土遺物（第42図～53図）

須恵器

坏（256・257）　256は器高5.3cm、復元口径11.0cmの身、長めの口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は内側に傾いた中窪みの面をなす。受部は水平に横方向に延びている。外底部の3/4を回転ヘラケズリされている。257も身で、薄い口縁部はほぼ直上に立ち上がり、これも内傾した中窪みの端部形態である。受部は斜め上方に延びている。

高坏（258～261）　有蓋のもの258～260と無蓋高坏261がある。258は蓋、中窪みのやや径の小さいつまみを持つ。259・260は短脚の脚部片、長方形透かしは3方向になるものと思われる。261は長脚一段になると思われる脚端部小片で、端部を薄く玉縁状に肥厚している。

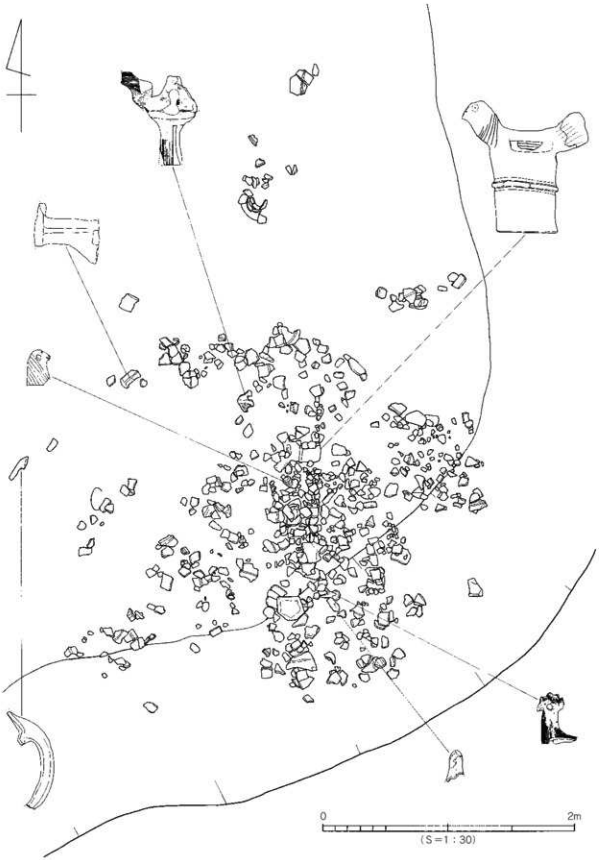
甕（262・263）　262は短頸のもののの口端部片である。端部をやや下った位置に細い断面三角形状の突帯が巡る。263は底部から胴部の片で、胴張り部に櫛描波状文が施されている。底部内面には直径1.5cm程度の竹管状工具を用いて底部を押し出し成形した痕跡が顕著に残っている。

甕（264～271）　頸部施文を持つ264～267、無文の269～271がある。268は端部のため不明であるが、施文があるものと考えられる。頸部に櫛描波状文を持つものは、口端部を上下、もしくは上方に拡張し、細い突帯で区画した施文帯に波状文を施している。小型のものでは突帯は1条であるが、大型の267になると2条一単位となっている。無文のもののうち、269は口端部を拡張してその直近の位置に突帯を巡らせる。270では突帯の位置は同様だが、口端部の拡張はない。また271では口端部がやや立ち気味になり、上方に面を持ってやや内側に端部を突出させ、端部直下に突帯を巡らせている。

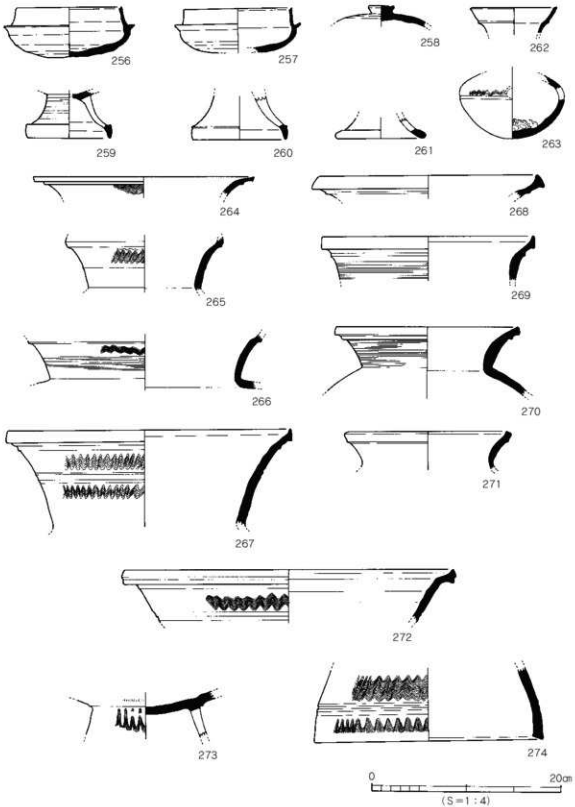
器台（272～274）　272は口端部の折り曲げから器台坏部と判断した。内面に稜を持って強く折り曲げられている。上方に拡張された口端部は外面の直下に断面三角形の突帯を巡らせている。横撫でによる低い突帯で区画された施文帯に櫛描波状文が描かれている。273は脚台部との接合部で、長方形と思われる透かしが4方向に復元できる。274は脚裾部、内湾して接地する。2条の突帯で区画された上下に櫛描波状文を持つ。端面は内方に僅かに突出した平坦面で、外端部で接地する。最下段透かしは三角形と思われる。

埴　輪

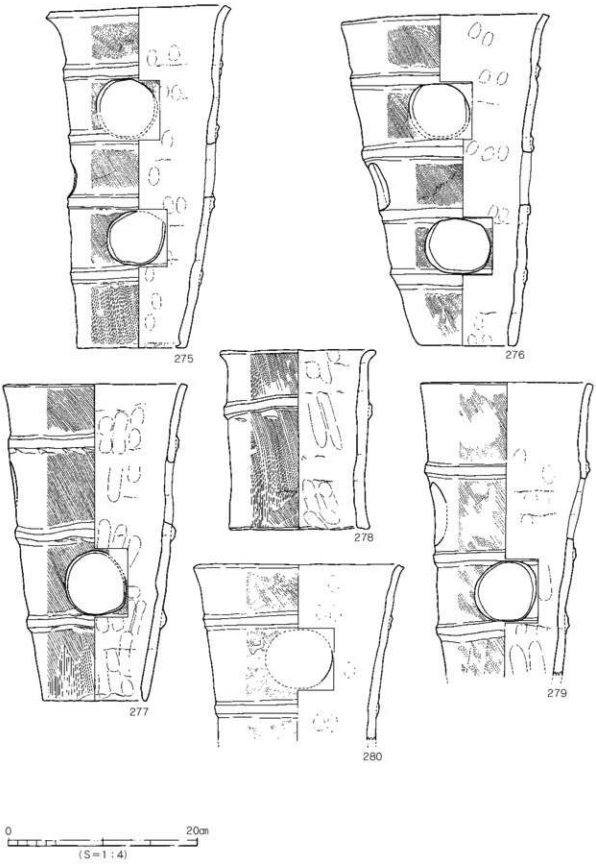
円筒・朝顔形埴輪（275～330）　円筒と判断できるもの275～288、319～323のうち、全容を知り得るものは小型の275～278の4本と、これに近い遺存の279・280の2本がある。異形の278を除いて、器高35cm、口径20cm、底径11cmを前後する値を示すが、その構成には4条突帯5段構成になる275・276、280と3条突帯4段構成の277、279がある。器面調整や突帯などの特徴はこれまでにみたE区出土の小型品と同様である。一方、278は器高19.0cm、口径16.3cm、底径14.6cm、口縁部は端部を短く折り曲げられておさめられている。器高中位よりやや上に1条の突帯が巡り、透かし孔が存在していた形跡はない。単独の円筒として存



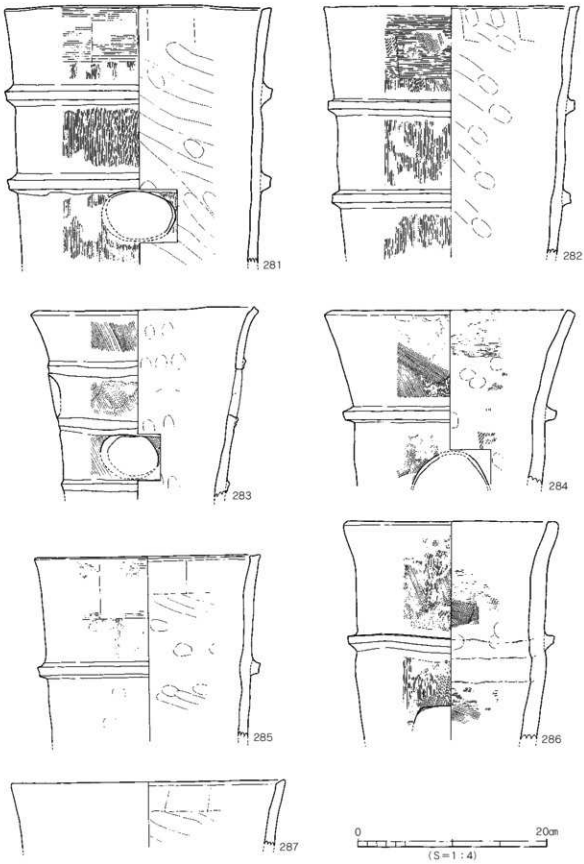
第41図　7区遺物出土状況図



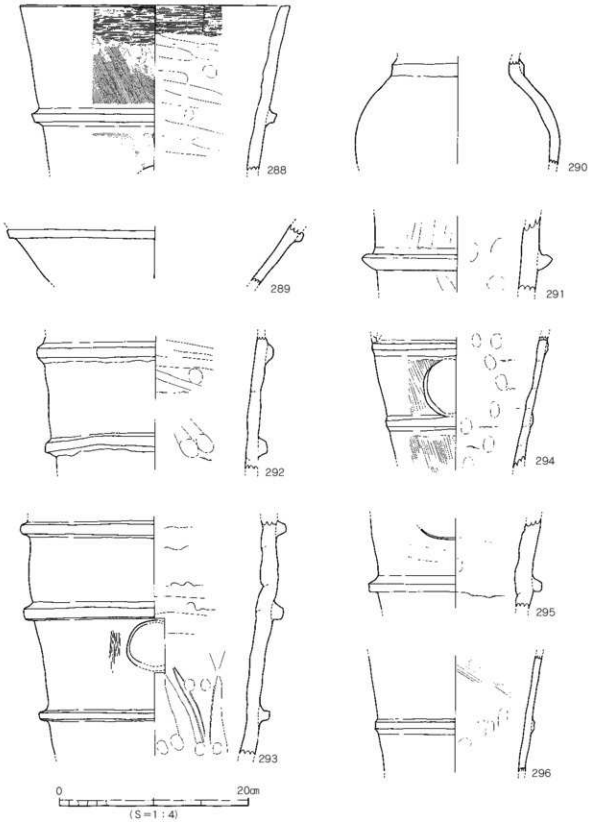
第 42 図　7 区出土遺物（1）



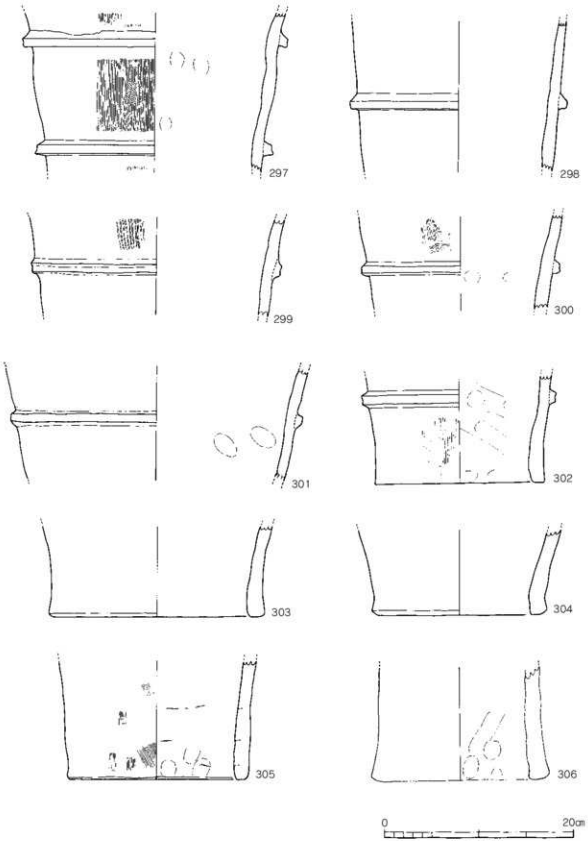
第43図　7区出土遺物（2）



第44図　7区出土遺物（3）



第45図　7区出土遺物（4）

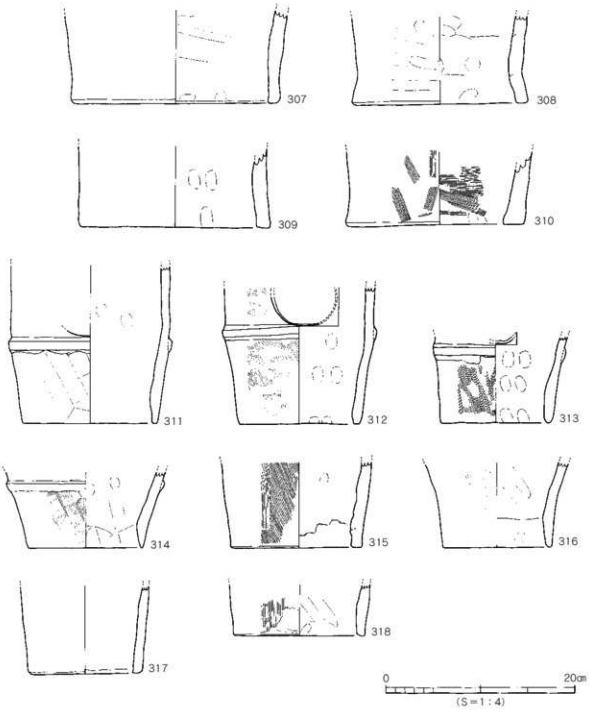


第46図　7区出土遺物（5）

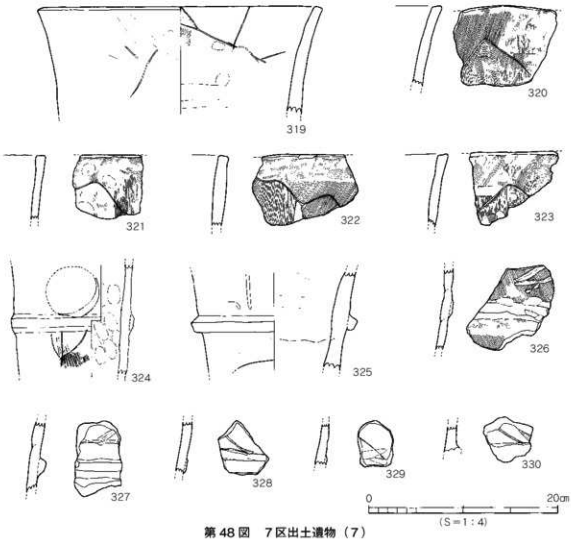
在していたものか、他の形象埴輪などと組み合って一体となっていたものかは不明である。円筒にはこれまでみてきたのと同様これら小型品のほかに中型・大型品があり、その特徴もE区のものとかわらない。

朝顔形埴輪と認定できるものは289、290の２点のみである。肩部の張りが小さく、長いのもE区同様である。胴部の破片で、291のような丸みを帯びた高い突帯を伴うものは、普通円筒ではなく形象の可能性もある。

319～330はなんらかの線刻と思われるものを持つものであるが、325以降のものは、調整時の傷と



第47図　7区出土遺物（6）

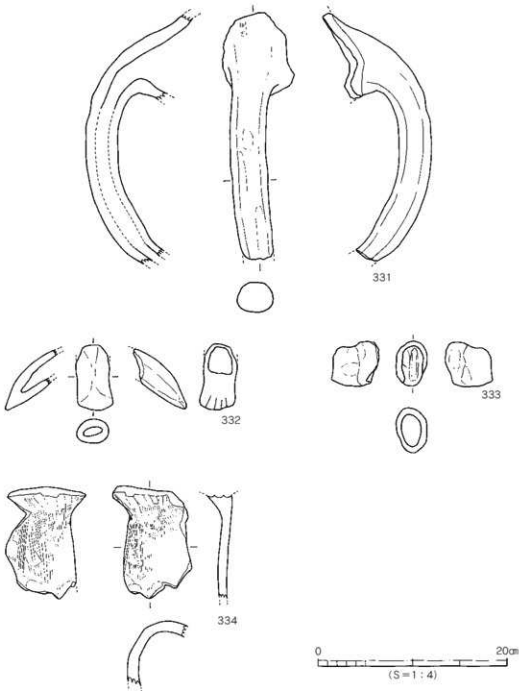


第48図　7区出土遺物（7）

判別がつきかねる小片や部分である。319は口縁部の内外面に斜線や直線を不規則に描いたもの、320～323は波状の線刻を口縁部外面に持っている。324の小型品は上端より3段目と思われる外面の突帯直下に下向きの矢印のような施文が施されている。

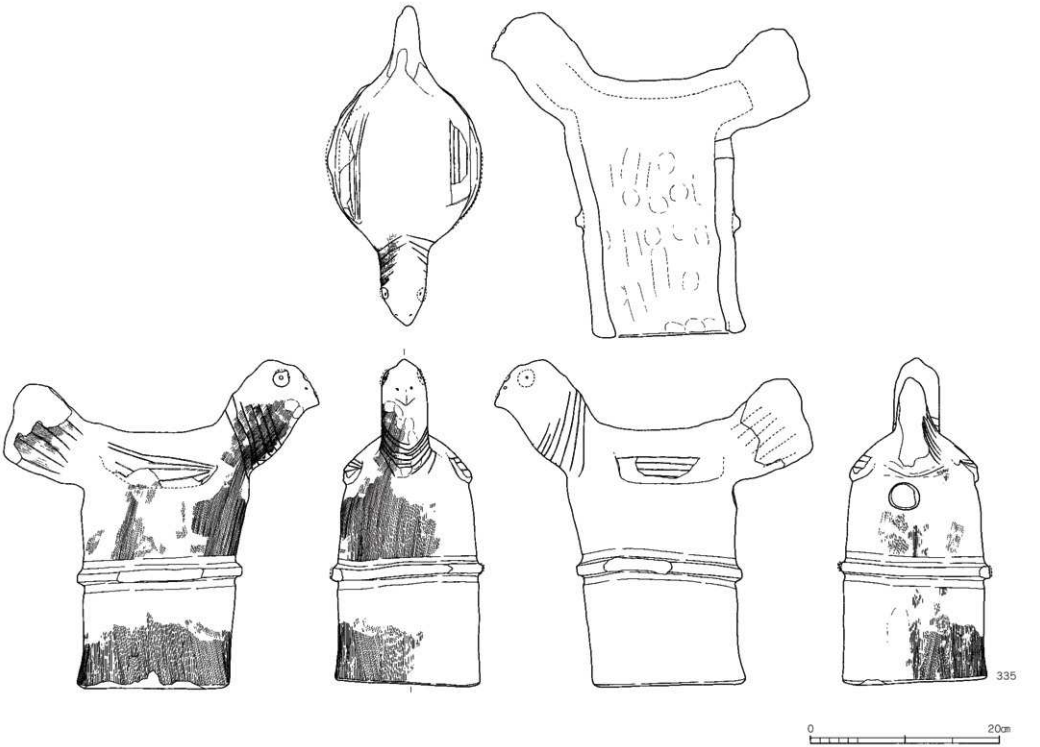
人物埴輪（331～334）　331は腕である。肩の張りに続くような様子がみられないので単純に体側に下していたものではないようである。腕はおおよそ4×3㎝の楕円形断面で中空の筒状、手の部分近辺でやや先細りとなり、反りが強くなっている。332は手で、指先にかけて厚みを減じる横断面楕円形の袋状を呈する。4本の短沈線で5本の指を表現している。333に指表現はないが、332と同様のつくりとなっているので人物の手と判断した。334は足と胴部の接合部であろうか。図の上端よりも下のほうが径の大きい下膨れで、断面は偏楕円形状となっている。

鶏形埴輪（335～343）　335は器高34.5㎝、全長33.7㎝、最大幅15.3㎝、基底部円筒径16.0㎝の雌鶏である。器面の剥離が著しいので目の表現が明らかでない。嘴の基部に小さな刺突で表現された一対の小孔は鼻孔であると思われる。耳羽は中央に直径1.7㎝の薄い円板を貼り、中央に小孔を施して表現されている。頭部左側ではこの粘土板が剥離しているので小孔のみが確認できる。翼は長さ11㎝、幅3.5㎝程度の薄い粘土板を貼って表す。この粘土板には長軸方向に数条の沈線が施され、羽を表現

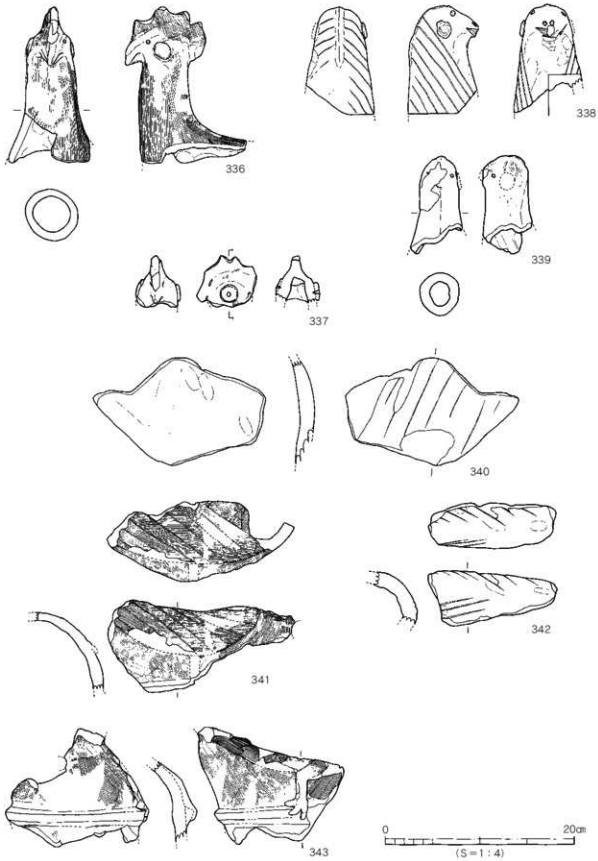


第49図　7区出土遺物（8）

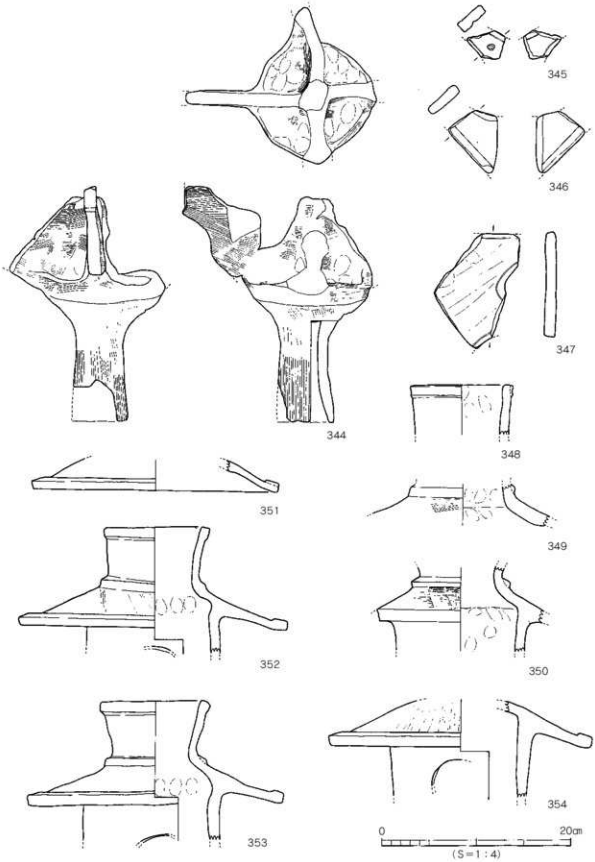
している。尾羽は6条の平行沈線で描かれ、頸の羽は平行斜線をもって表現されている。翼や尾以下の部分は円筒に移行し、ハケ目調整され、脚は表現されていない。尾の直下には直径3㎝の円孔が施されている。円筒部には断面台形の突帯が1条巡る。336・337は雄鶏で、336は頭部から頸部である。鶏冠は厚さ0.8cmほどの粘土板からなり谷部を切り取って5個所の突起として成形されている。嘴は細い線刻によって上嘴と下嘴とに分けられている。鼻孔はない。目は直径0.3cmの円形刺突で、耳羽は直径1.6cmの粘土円板貼り付けで表現される。全体的にハケ目調整されているが、顔の部分だ



第50図　7区出土遺物（9）



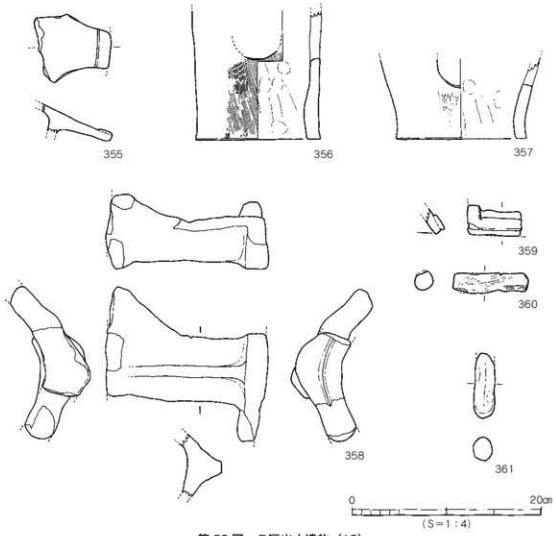
第51図　7区出土遺物（10）



第52図　7区出土遺物（11）

けをナデ消している。337はやや小ぶりな雄鶏頭部片、鶏冠の起伏に引き続いて短い嘴がある。目や鼻孔の表現はなく、耳羽だけが中央に穿孔された直径1.7cmの粘土板で貼り付けられている。338・339は雌鶏頭部である。338の頭部から頸部にかけては中実で、頸部下位以下が中空となっている。頭頂部から背部にかけて、鶏冠を表現したと思われる不明瞭な帯状の隆起がある。嘴基部には一対の小孔で鼻孔が、また目は直径0.5cmの深い刺突で表現されている。耳羽は目と同サイズの非常に浅い刺突による窪みを持った直径1.5cm程度の粘土板貼り付けによっている。頸の羽は斜線で表されている。339はやや小ぶりのもので、器面の傷みが進んでいる。頭頂部には低い鶏冠の隆起帯がみられる。嘴や耳羽は欠失しているが、耳羽の粘土板剥離痕は確認できる。目の部分には直径0.3～0.4cmの刺突痕がある。この個体は頭部まで中空となっている。

340～343は胴部以下の部分である。翼の表現にはふたとおりある。340・341、343のように斜線で表現するものと、342のように背を斜線で、翼を水平基調の線刻で表現するものとである。ちなみに341、343は同一個体と思われるもので、粘土板でやや盛り上げた部分に斜線で翼の羽を表現する。343では翼の下から薄い粘土板で３本指の脚が籠状の突帯まで下りている。341にも同じ部位に剥離痕があり、同一個体の左右であることがわかる。



第53図　7区出土遺物（12）

蓋形埴輪（344～357）　344～347は立飾りで、344は飾り板の一部と挿入軸部の端部までが遺存している。軸部は直径5.2～6.3cmのやや裾広がりの円筒形で、長さ９cm程度である。軸部上方のラッパ状の広がりに続いて、同じ角度で飾り板が斜め上方に延び、弧状の抉りを経て角度を変え、小さな三角形の突起をなした後、上方に立ち上がる。およそすべての部分にハケ目調整が行われており、飾り板の遺存している部分に線刻などの施文はみられない。オレンジ色の色調に焼成されている。345～347は飾り板の片、両面の縁に沿って細沈線が施されている。345の片面にみられる直径0.5cmの窪みは施文を意図したものかどうかわからない。348～355は笠部あるいは受部で、概して淡黄色の軟質な焼成であるが、349だけは344と同様のオレンジ系の焼成となっている。笠部については規格性が高く、すべてが直径28～29cm代、受部径も10～11cmにおさまっている。受部上端、笠部外縁端には薄い粘土帯を貼りつけて肥厚帯を設け、受部と笠部の境の受部基部には１条の突帯が巡る。全体に無文で、笠部のハケ目もナデ消すが、354ではその痕跡が残っている。台となる円筒は、直径14～15cm程度の円筒で、突帯を持たず、笠部との接合部をやや下った位置に円孔を持っている。357はこの規格からややはずれ、円孔が底部付近にあり上開きの器形となっている。何か別の器種に付随する円筒かもしれない。

家形埴輪（358～360）　358は長さ16.3cmを測る切妻屋根の棟部分である。丸瓦風に成形した厚さ1.8cmの粘土板に肉付けをして棟や妻部分を成形している。359は切妻屋根の軒、隅角部分かと思われる小片である。縁に沿って薄い粘土帯を貼り付けている。360は直径1.5cm、長さ7.5cmの円筒状に手づくねで成形したもので、堅魚木かと思われる。棟との接合剥離痕らしき痕跡がある。358には堅魚木が載っていた痕跡がないので、同一個体ではない。

不明形象埴輪（361）　一端を丸く仕上げた棒状のもので、他端にはいずこかに貼り付いていたような斜めの削ぎ痕がある。人物の一部であろうか。

c．１区出土遺物（第54・55図）

須恵器

坏（362）　器高5.5cm、復元口径11.4cmの身である。内傾して長めに延びる口縁は端部を丸く収める。外底部の３/４を回転ヘラケズリされるが、その後軽くナデられている。

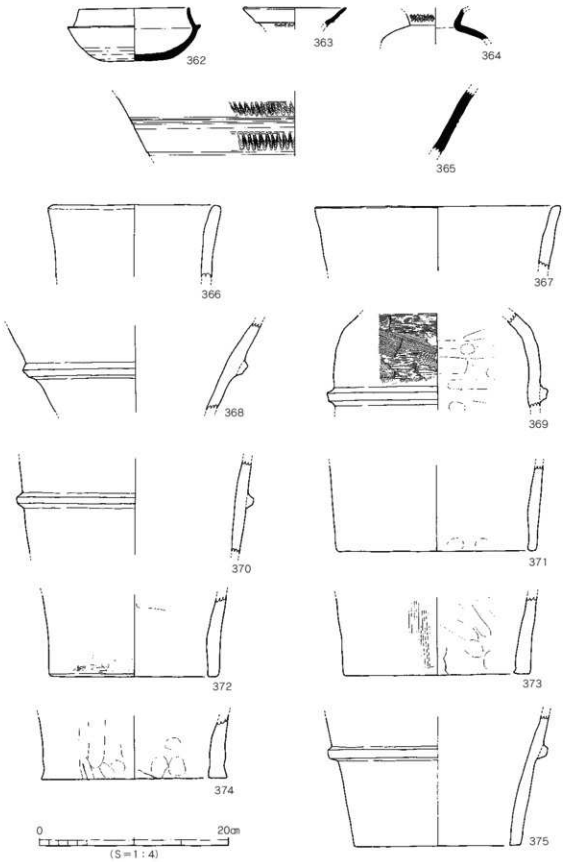
甕（363・364）　363は口縁部の小片、口端部をやや下った位置に段、以下の頸部には櫛描波状文が施されている。364は頸基部から肩部にかけての片で、短頸広口の器形、頸部には櫛描波状文がある。

甕（365）　２条の沈線で区画された上下の施文帯に右下がりの櫛描波状文を持つ大型甕頸部である。下段の波状文直下にも沈線が１条確認できる。

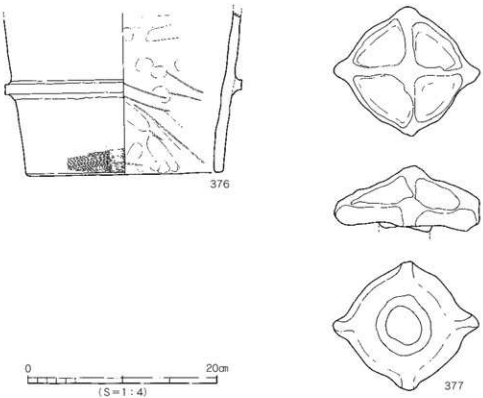
埴　輪

円筒・朝顔形埴輪（366～376）　366・367が円筒と判断できる口縁部、368・369が朝顔の口縁部と肩部である。須恵質に焼成されたものには369、373、376がある。このうち基底部376の最下段突帯以下の部分には焼成時の破損のような痕跡が比較的広い部分にみられるが、墳丘盛土に隠れてしまう部位であるので、そのまま埋めて使用したものであろう。

蓋形埴輪（377）　飾り板の挿入軸部と板のほとんどを欠失した飾り板基部である。



第 54 図　1 区出土遺物（1）



第55図　1区出土遺物（2）

d．2区出土遺物（第56図）

埴　輪

円筒埴輪（378～386）　大型のものが多い。378で復元口径29.6cm、379で31.0cmを測る。4条突帯、5段構成になるものと思われ、378と386のようなものを組み合わせると、おおよそ器高60cm程度に復元できるものと考えられる。

g．3区出土遺物（第57図）

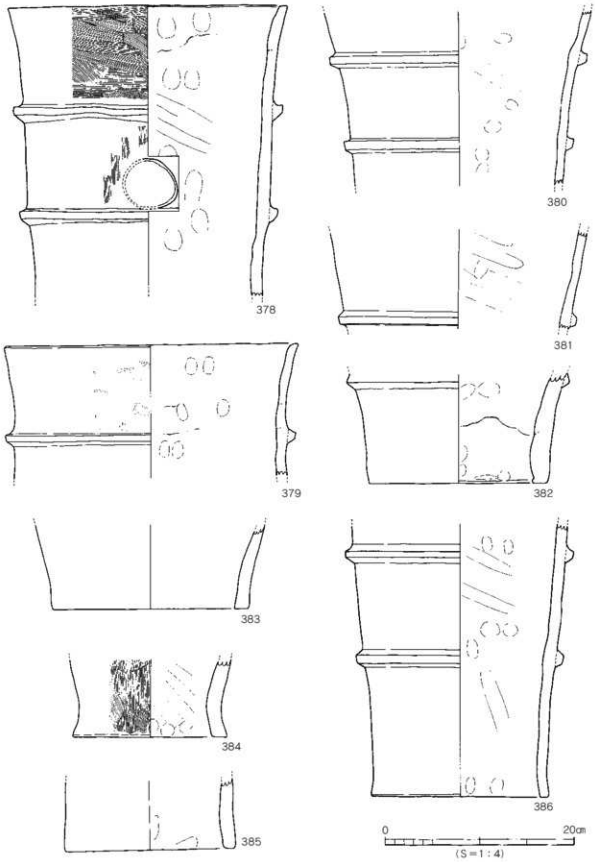
須恵器

器台（387）　坏部片、底部には脚部との接合剥離痕がある。底部付近の外面は叩きの後カキ目調整され、これに伴い内面には当て具痕がある。以上の内外面はナデられ、外面には櫛描波状文が施されている。

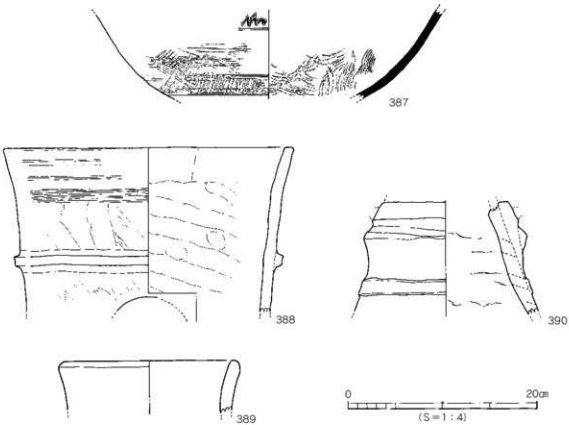
埴　輪

円筒埴輪（388・389）　口縁部以下2段目までの388は若干赤味を帯びるが須恵質の焼成になるものである。復元口径31.2cmの大型品、断面方形の突帯を持つ。

人物埴輪（390）　輪積みで成形された裾広がりの薄い円筒に分厚い突帯状に粘土を貼り付けて成形されたもの。人物の腰部付近であろうか。



第 56 図　2 区出土遺物

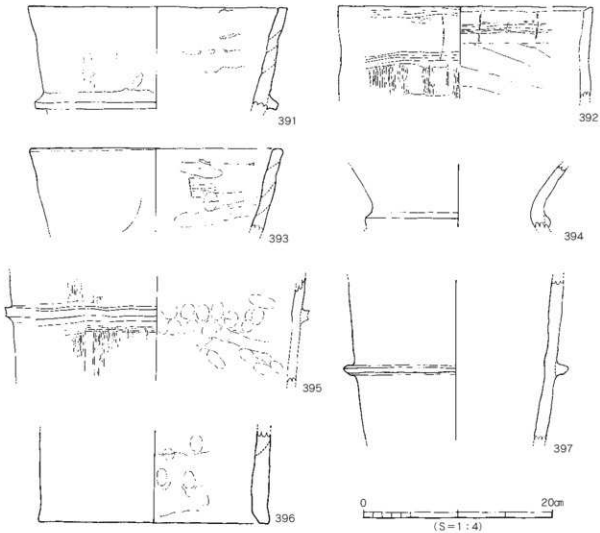


第57図　3区出土遺物

e．4区出土遺物（第58図）

埴　輪

円筒・朝顔形埴輪（391～397）　円筒の口縁部のうち、須恵質の392はほぼ直上に立ち上がり、口端部を内側に傾いた面に仕上げている。口端部内面はB種ヨコハケで調整されている。口端面もハケ目調整されているが、内面のB種とは異なり、工具が止まった痕跡がない連続したハケ目である。395の胴部も須恵質に焼成されている。



第58図　4区出土遺物

1．出土地点不明遺物（第59図）

須恵器

高坏（398～400）　398は無蓋高坏の坏底部である。脚に3方向の透かしを持つ。399は有蓋高坏の脚端部片で、器壁は薄く端部も比較的丸みを帯びて薄く仕上げられている。400は蓋、中窪みの小振りなつまみを持つ。

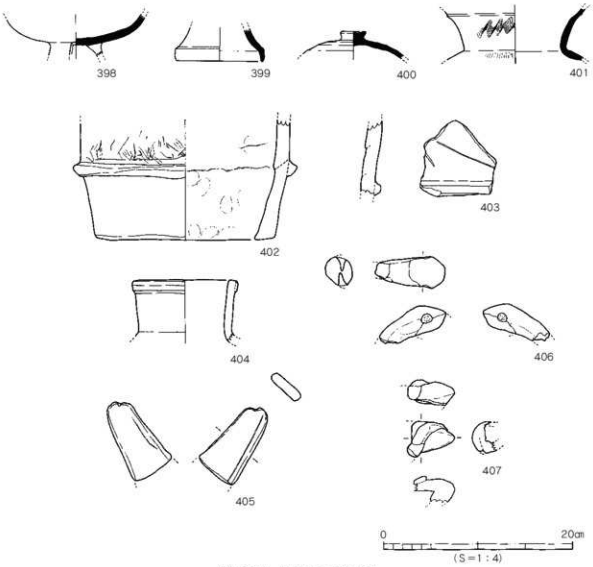
甕（401）　頸部に細い1条の突帯とその直下に櫛描波状文を持つもので、器壁は薄い。

埴　輪

円筒埴輪（402・403）　402の底部は最下段突帯以下が器形のわりに短いもの、内面ユビおさえ、外面をナデによって底部調整を行っている。403は線刻を持つ破片で、外面に斜めの沈線が2条施されていることが確認できる。

蓋形埴輪（404・405）　404は軸受部片、復元径11·0cm、高さ5.6cm、上端部外面に薄い突帯が巡る。405は飾り板の突起部分で磨滅が進んでいるが、両側縁沿いに細沈線が施されているのがわかる。

水鳥形埴輪（406）　深い刺突で目を表し、嘴は端部を欠くが、上嘴と下嘴を線刻で表現している。



第 59 図　出土地点不明遺物

馬形埴輪（407）　尾の先端部の片である。先細りの袋状の本体に薄い粘土帯を長軸に対して斜めに貼り付けている。尾をまとめた革紐に見立てた螺旋状の貼り付けであったものと思われる。

（4）古墳に伴わない遺物（第60・61図）

各調査区から、直接古墳に伴わない遺物が少量出土しているので、ここで一括して扱う。

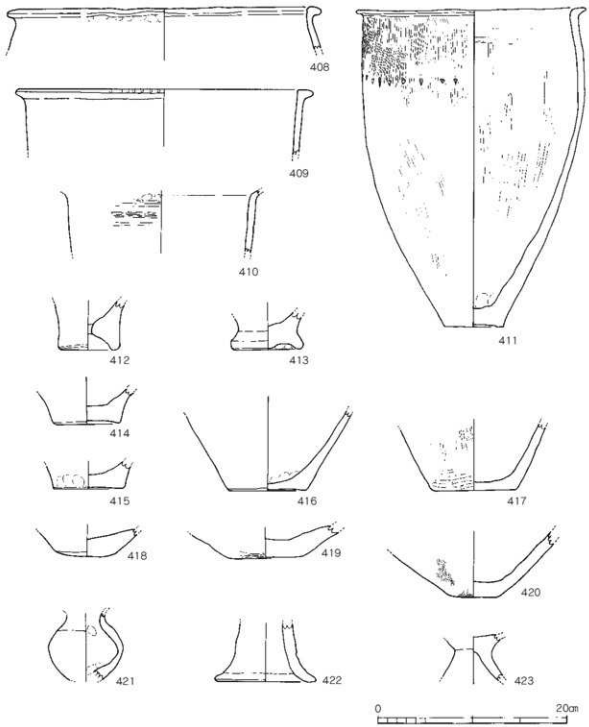
弥生土器

甕（408～414）　各時期のものがある。408～410は前期末～中期初頭段階のもの、408・409が貼り付け口縁、410が折り曲げ口縁のものである。408が無文、409は口端部に刻み目を持つ。410は口端部を欠くが、頸部に櫛歯状工具を用いた多重の直線文を持つ。417は中期前半のもので、器高33.6cm、口径24.5cmを測る。平底の底部と折り曲げ口縁を持ち、口径と胴部最大径がほぼ等しい。外面胴部の上位に刺突列点文

を施されている。胴部外面をタテハケ、口縁部内面をヨコナデされる以外はヘラミガキされている。412は中期後半の底部、中央に焼成後の穿孔がある。413は後期前半の底部で、鉢の底部であるかもしれない。

壺（414～421）　底部414・415は前期～中期、416・417は中期の平底の底部、418～420が後期のものである。421は後期のミニチュア壺片である。

支脚（422）　受部の形態は不明、裾部の破片である。



第60図　古墳に伴わない遺物（1）

鉢（423）　後期前半頃の台付鉢と考えられる破片。

須恵器

高坏（424）　6世紀後半、長脚二段無蓋高坏の坏部片。2条の稜で区画された施文帯に粗い櫛描波状文を施している。

壺（425・426）　貼り付け高台を持つ底部片2点。8世紀代。

椀（427・428）　427は精製された胎土で白色系に焼成された椀の破片である。428は円板高台を持つ椀、切り離し痕はナデ消されているのに加えて磨滅しているので、手法は不明である。灰白色の軟質な焼成となっている。10世紀代のもの。

土師器

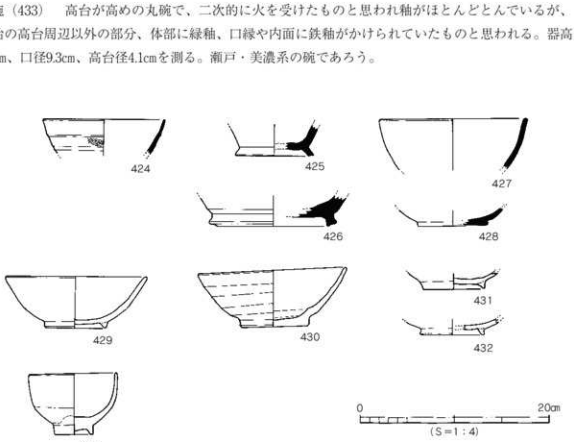
椀（429～431）　429は内面黒色処理をされたもので、器高5.5cm、口径15.0cmを測る。直径6.6cmの貼り付け高台は断面台形状で、全体的にぽってりしたつくりとなっている。内面は磨かれているが、磨滅のため、単位、方向等の詳細は不明である。在地の産、430は器高6.3cm、口径15.7cmの円板高台の椀である。直径7.3cmの高台は切り離し痕をナデ消されているが、ヘラ切りによるものと思われる。僅かにスノコ痕がみられる。体部外面には回転台成形のヨコナデ痕が残っている。これらはおおよそ10～11世紀代のものと考えられる。431は断面三角形の貼り付け高台を持つ底部で、前二者よりも下る時期のものである。

瓦　器

椀（432）　和泉型瓦器椀と思われるものの底部片である。12世紀代のものであろう。

陶　器

碗（433）　高台が高めの丸碗で、二次的に火を受けたものと思われ釉がほとんどとんでいるが、露胎の高台周辺以外の部分、体部に緑釉、口縁や内面に鉄釉がかけられていたものと思われる。器高6.5cm、口径9.3cm、高台径4.1cmを測る。瀬戸・美濃系の碗であろう。



第61図　古墳に伴わない遺物（2）

第４節　まとめ

船ヶ谷向山古墳は、直径26mの円丘に続くくびれ状の墳丘形態から、全長32m程度の帆立貝形の前方後円形の墳丘形態をなす可能性が高いとした。前方部端が未検出であることから、さらに前方部が延びる可能性もあるが、いずれにせよ前方後円墳であることはほぼ間違いない。削平されているため主体部は遺存していなかったが、埴輪を主とした多くの遺物の出土をみている。古い調査で、記録も十分ではないので、報告は遺物を主体とした内容にならざるを得なかった。これらの遺物からすると、古墳はＴＫ23型式段階、５世紀末頃のものと考えられる。円筒埴輪には大中小の別があるが、これらがどのように使い分けられていたのかはよくわかっていない。比較的高く、かっちりした突帯を持ち、また須恵質に焼成されたものが一定量ある。形象埴輪には人物、動物、家、器財として蓋がある。これらの多くは、Ｅ区とした南東側のくびれに相当する部分と７区北西側くびれ相当部分で出土している。動物埴輪のうち、馬は南東側に、鶏は北西側に集中しており、それぞれの器種が意味を持って限られた場所に立てられていたことがわかる。また、馬の脚端部に切り取りによる蹄表現がみられ、脚部を墳丘に埋設することを前提には製作されていないものと考えられる。

第１章でも述べたとおり、松山平野北部域、石手川以北の前方後円墳として把握されているのは、前期の朝日谷２号墳と、後期の永塚古墳とこの船ヶ谷向山古墳の３基のみである。これらの古墳のうち前２者は旧郡の温泉郡に属する古墳で、船ヶ谷向山古墳が和気郡内に所在しているが、地理上の立地としては松山平野西部の一連の丘陵麓にあるということで一致している。前期の朝日谷は西方の臨海部や北方の沖積低地を経て海を意識した立地であり、他は丘陵東麓にあって西方の沖積低地を見おろす位置にある。以上のように朝日谷２号墳が前期古墳らしくより広範なエリアを意識しているとはいえ、平野北部の特に沖積低地を視野に入れた立地となっている点では３者ともに共通するところである。朝日谷２号墳はともかく、向山、永塚両古墳は同じ系譜につながる首長墓である可能性は高い。

文　献

井上裕一「馬形埴輪の研究」『古代探叢Ⅱ―早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集―』
早稲田大学出版部 1985

遊佐和俊『帆立貝式古墳』同成社 1988

日野尚志「松山平野における５郡境について」『久米高畑遺跡―１次・７次調査―』松山市教育委員会・
松山市埋蔵文化財センター 2009

附編　　愛媛県松山市三味線山古墳出土人骨

*　　**
松下真実・松下孝幸

【キーワード】：愛媛県、古墳人骨、石室、箱式石棺、倒置鉢

はじめに

愛媛県松山市祝谷東町乙815-4に所在する三味線山古墳の発掘調査が土地開発事業に伴って1981（昭和56）年11月におこなわれ、２基の古墳と１基の土壙墓などから人骨が検出された。

愛媛県から出土した古墳人骨のうち筆者らが調査や研究にかかわったものは、今治市相の谷古墳群（松下・他1995）、二の谷２号墳（松下、2000）、馬島長山１号墳、鳥越１号墳、古谷大山谷古墳（松下真実・他、2013）のほかに松山市宮前川北斎院遺跡（松下、1998a）、客谷古墳群（松下、2006a）、伊予市猪の窟古墳（松下、2006c）から出土した人骨がある。また、弥生時代から古墳時代にかけての人骨としては伊予市の原池遺跡の石棺出土の熟年の女性骨がある（松下、1998b）が、古墳人骨の調査研究例数が少なく、まだ愛媛県内での古墳人の特徴を明確にできない状況である。

古墳から検出される人骨は盗掘を受けている場合が多く、保存状態はよくない。今回、本古墳から出土した人骨の保存状態も必ずしも良好なものではなかったが、箱式石棺に埋葬された被葬者の骨は比較的良好であった。人骨の計測や観察をおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資　　料

1981（昭和56）年の発掘調査では２基の古墳と１基の土壙墓などから人骨が検出されている。１号墳の内部主体は横穴式石室で、２号墳の内部主体は箱式石棺である。土壙墓では人骨の上に鉢が伏せてあった。表２に示しているとおり、１号墳からは２体分の人骨が散乱状態で検出されている。２号墳の箱式石棺からは埋葬状態を保った１体の人骨が、土壙墓からは埋葬姿勢の不明な新生児骨が、他に出土遺構は不明であるが成人の骨片が出土している。従って、人骨は表１に示すとおり合計５体が出土したことになる。年齢区分を表３に示した。

なお、１号墳、２号墳から出土した人骨は古墳時代に、土壙墓はかぶせてあった土器の考古学的所見から古墳時代前期に属する人骨と推測されている。

表１　資料数（Table 1. Number of materials）

成人			幼小児	合　計
男性	女性	不明	（含成年）	
1	0	1	3	5

* Masami　MATSUSHITA、** Takayuki　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

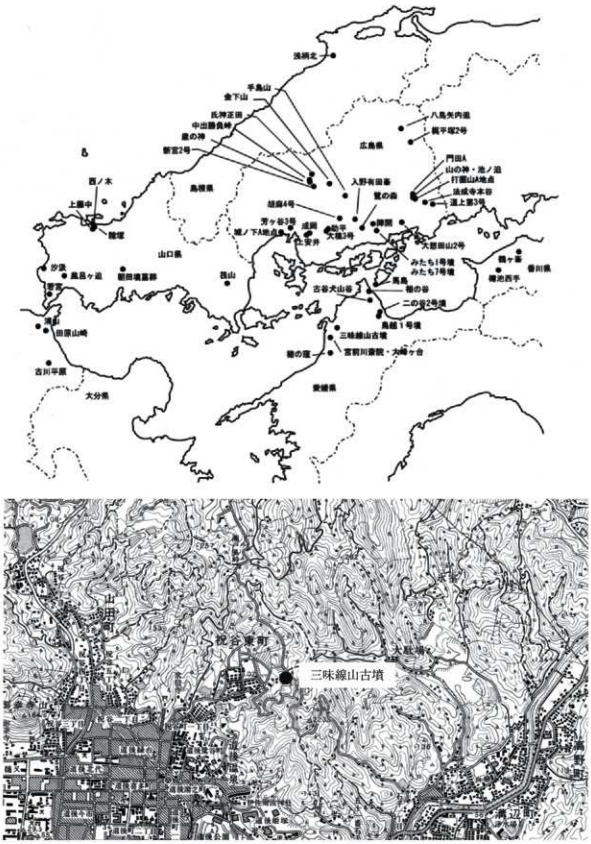


図１　遺跡の位置（1/25,000）
(Fig.1　Location　of　the　Syamisenyama　Tumulus,　Mathuyama　City,　Ehime　Prefecture)

表２　出土人骨一覧（Table 2. List of skeletons）

人骨番号	性別	年齢	備　　考
１号墳１号人骨	男性	不明	横穴式石室
１号墳２号人骨	―	小児（10 ～ 11 歳）	横穴式石室
２号墳人骨	男性	成年（17 ～ 18 歳）	箱式石棺
ＳＴ―１人骨	―	新生児	鉢をかぶせた土壙墓
出土遺構不明人骨	不明	不明	

表３　年齢区分（Table 3. Division of age）

年齢区分		年　　齢
未成人	乳児	１歳未満
	幼児	１歳～ ５歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	６歳～ 15 歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16 歳～ 20 歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21 歳～ 39 歳
	熟年	40 歳～ 59 歳
	老年	60 歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書　1996）を参照されたい。

所　　見

各人骨の残存部は図２・３に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

１号墳１号人骨（男性、年齢不明）

１．頭蓋

保存状態は極めて悪く、頭蓋骨片が残存しているにすぎない。計測はできなかった。

２．歯

遊離歯が残存していた。残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

／／／／４／／／／／３／／６／／［／：不明］

／／／／／／／／／／／／／／７／

（1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯）

咬耗度は Broca の３度（咬耗が象牙質まで及ぶ）である。

３．四肢骨

左側上腕骨体、左側寛骨の一部、右側大腿骨体、左側脛骨遠位端、右側腓骨体が残存していた。

（１）上腕骨

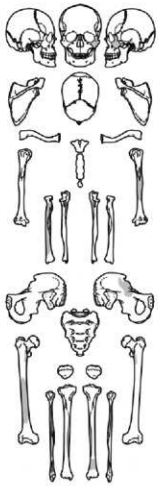
左側の骨体が残存していた。骨質の状態は良好である。骨体は太く、三角筋粗面の発達は良好である。

計測値は、中央最大径が 22mm（左）、中央最小径は 19mm（左）で、骨体断面示数は 86.36（左）となり、骨体には扁平性は認められない。中央周は 69mm（左）で、骨体は大きい。

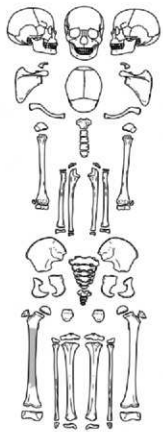
（２）大腿骨

右側の骨体が残存していた。骨体は丈夫で、粗線の発達は良好である。

計測値は、骨体中央矢状径が 31mm（右）、中央横径は 27mm（右）で、骨体中央断面示数は 114.81（右）



三味線山古墳・1号墳1号人骨(男性・年齢不明)



三味線山古墳・1号墳2号人骨(幼児)

図2　人骨残存図（アミかけ部分）
(Fig.2 Regions of preservasion of the skeleton.　Shaded sreas are preserved.)

となり、骨体両側面の後方への発達は極めて良好である。骨体中央周は91mm（右）で、骨体は太い。

（3）腓骨

左側の骨体遠位部のみが残存していた。保存状態は悪く、計測はできない。

4．性別・年齢

性別は上腕骨体および大腿骨体が大きいことから男性と推定した。年齢は不明である。

1号墳2号人骨（小児）

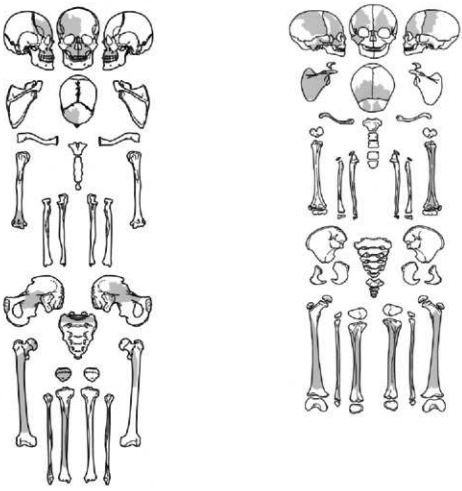
残存していたのは右側大腿骨のみである。

1．大腿骨

右側の大腿骨体のみが残存していた。計測値は、骨体中央矢状径が15mm（右）、中央横径は16mm（右）、骨体中央断面示数は93.75（右）、上骨体断面示数は73.68（右）、骨体中央周は50mmである。

2．性別・年齢

性別は不明である。年齢は、大腿骨体の大きさから小児（10～11才）と推定した。



三味線山古墳・2 号墳人骨（男性・成年）　　三味線山古墳 ST-1（幼児）

図３　人骨残存図（アミかけ部分）
(Fig.3 Regions of preservasion of the skeleton.　Shaded sreas are preserved.)

２号墳人骨（男性・成年）

１．頭蓋

前頭骨の右側と上顎骨、下顎骨の右側顎舌骨筋線部が残存していたが、保存状態は極めて悪い。眉上弓および眉間の隆起は弱く、前頭結節の発達も悪い。

縫合は、三主縫合のうち冠状縫合の一部が観察できた。冠状縫合は、内外両板とも明瞭で開離している。

２．歯

上顎骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

⑧	7	6	⑤	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
⑧	／	6	5	④	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／

［○：歯槽開存　／：不明］

（1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯）

咬耗度は Broca の２度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。

3. 四肢骨

1）上肢骨

右側上腕骨遠位端、右側橈骨体が残存していたが、保存状態は極めて悪い。

（1）上腕骨

右側上腕骨の骨体遠位端のみが残存していた。骨体は細い。保存状態は悪く、計測はできなかった。

（2）橈骨

右側橈骨体が残存していた。骨体は細く、骨間縁の発達は弱い。

計測値は、骨体中央矢状径は 10mm（右）、中央横径は 15mm（右）、中央断面示数は 66.67（右）、骨体中央周は 40mm（右）である。

2）下肢骨

両側の寛骨腸骨体、仙骨の一部、両側大腿骨体、右側膝蓋骨、右側脛骨体が残存していたが、保存状態は極めて悪い。

（1）大腿骨

右側骨体と左側骨体近位端が残存していた。保存状態は悪い。骨頭の骨端線は明瞭である。骨体は細く、粗線の発達も悪い。計測はできなかった。

（2）脛骨

右側の骨体が残存していた。保存状態は悪い。骨体は細く、ヒラメ筋線の発達は悪い。骨体の断面形はヘリチカのⅡ型を示している。計測はできなかった。

4. 性別・年齢

性別は、寛骨の大坐骨切痕の角度が小さいので男性と推定した。年齢は、冠状縫合が内外両板とも開離しており、大腿骨頭の骨端線が明瞭で、恥骨結合面の平行隆線および溝が明瞭であることや、歯の萌出と歯根の形成程度により成年（17 ～ 18 才）と推定した。

ＳＴ－１（新生児）

前頭骨と頂頭骨、右側側頭骨、左側岩様部、右側頬骨、右側肩甲骨、右側鎖骨、左側上腕骨、大腿骨、脛骨が残存していた。

年齢は、歯冠の形成程度および骨の大きさから新生児と推定した。

出土遺構不明（性別・年齢不明）

出土遺構は不明であるが成人の骨片が出土している。四肢骨の一部と岩様部を確認することができるが、いずれも左右不明である。四肢骨の緻密質が厚いことから成人骨と考えられる。性別・年齢は不明である。

考　　察

比較的保存状態が良好で、計測が可能であった１号墳１号人骨の上腕骨と大腿骨について、愛媛県および周辺の古墳人骨と比較をおこなった。

1. 上腕骨

まず上腕骨であるが、本例の骨体中央周は 69mm（左）で、表４では猪の窪Ａと同値で、骨体は太

い。しかし、骨体断面示数は 86.36（左）で、表４では最も大きく、骨体には扁平性が認められない。

２．大腿骨

一方、大腿骨は、骨体中央周は 91mm（右）で、表５では猪の窪Ａに次いで大きく、大腿骨体は太い。骨体中央断面示数は 114.81 で、表５ではもっとも大きく、骨体両側面の後方への発達は極めて良好である。

表４　上腕骨計測値（男性、右、mm）（Table 4. Comparison of measurements snd indices of male right humeri）

		三味線山 古墳人 愛媛県 松山市 （松下真・他）	相ノ谷 古墳人 愛媛県 今治市 （松下・他）	猪の窪 古墳人 愛媛県 伊豫市 （松下）		鶴ヶ峯 古墳人 香川県 坂出市 （松下）
		１号墳１号	３号墳人骨	A	B	第１主体
5.	中央最大径	22　（左）	18	23	21	22　（左）
6.	中央最小径	19　（左）	14	19	16	18　（左）
7.	骨体最小周	－	53	68	59	63　（左）
7 (a).	中央周	69　（左）	54	69	62	68　（左）
6/5	骨体断面示数	86.36（左）	77.78	82.61	76.19	81.82（左）

表５　大腿骨計測値（男性、右、mm）（Table 5. Comparison of measurements and indices of male right femora）

		三味線山 古墳人 愛媛県 松山市 （松下真・他）	二の谷 古墳人 愛媛県 今治市 （松下）	猪の窪 古墳人 愛媛県 伊豫市 （松下）		鶴ヶ峯 古墳人 香川県 坂出市 （松下）	博池西手３号 古墳人 香川県 善通寺市 （松下）
		１号墳１号	２号墳	A	B	第１主体	FE-1
6.	骨体中央矢状径	31	23	30	27	29　（左）	26　（左）
7.	骨体中央横径	27	27	29	24	26　（左）	29　（左）
8.	骨体中央周	91	81	92	80	87　（左）	85　（左）
6/7	骨体中央断面示数	114.81	85.19	103.45	112.50	111.54（左）	89.66（左）

要　　約

愛媛県松山市祝谷東町乙 815-4 に所在する三味線山古墳の発掘調査が土地開発事業に伴って 1981（昭和 56 年）年 11 月におこなわれ、２基の古墳と１基の土壙墓などから５体の人骨が検出された。

愛媛県での古墳時代人骨の調査報告例は少なく、本遺跡から出土した古墳人骨は資料としては貴重である。人骨の保存状態は必ずしも良好なものではなかったが、人骨の計測や観察をおこない、次の結果を得た。

１．本遺跡から出土した５体の人骨は、考古学的所見から古墳時代に属する人骨と推定される。

２．出土した人骨は、成人骨が２体、未成人骨が３体で、成人骨のうち１体は男性であるが、もう１体は骨片のために性別不明である。未成人骨は、成年男性骨が１体、小児骨が１体、新生児骨が１体である。

３．計測値は、成人男性（１号墳１号人骨）の上腕骨は、中央最大径 22mm（左）、中央最小径 19mm（左）、骨体断面示数 86.36（左）、中央周 69mm（左）で、骨体は太いが、扁平性は認められない。大腿骨は、骨体中央矢状径 31mm（右）、中央横径 27mm（右）、骨体中央断面示数 114.81（右）、中央周 91mm（右）で、骨体は太く、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。

４．本遺跡から出土した古墳人骨の保存状態は良好なものではなかったが、１号墳１号人骨は上腕骨

や大腿骨が太く、愛媛県内の古墳人としては屈強な人物であったことがうかがえる。しかし、愛媛県内での古墳人骨の資料は少なく、本県の古墳人の形質的特徴をまだ明確にすることができない。今後、資料数の増加を期待したい。また、鉢をかぶせてあった土壙墓からは新生児骨が検出された。類例のない珍しい埋葬である。

謝辞

＜擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた松山市埋蔵文化財センターの皆様に感謝いたします。＞

＜参考文献＞

1. 松下孝幸、他、1995：愛媛県今治市相の谷古墳群出土の古墳時代人骨。
相の谷古墳群杉谷支群埋蔵文化財発掘調査報告書（埋蔵文化財発掘調査報告書第 57 集）：41-54.

2. 松下孝幸、1998a：愛媛県松山市宮前川北斎院遺跡出土の古墳時代人骨。
斎院・古照 - 新松山空港道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（遺物編）：525-531.

3. 松下孝幸、1998b：愛媛県伊予市原池遺跡出土の人骨。
四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ Ⅱ 伊予市編：175-180.

4. 松下孝幸、2000 ：愛媛県今治市二の谷 2 号墳出土の古墳時代人骨。
旦遺跡・宮之前遺跡・長沢石打遺跡・長沢 1 号墳・長沢 6 号墳・二の谷 2 号墳・鉄又古墳群・郷桜井西塚古墳（一般国道 196 号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ）
（埋蔵文化財発掘調査報告書第 87 集）：232-249.

5. 松下孝幸、2006a：松山市客谷古墳群出土の古墳人骨。大峰ヶ台遺跡Ⅲ（松山市文化財調査報告 110）：143-150.

6. 松下孝幸、2006b：香川県善通寺市樽池西手山頂墳 3 号出土の古墳人骨。
善通寺市内発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ：64-71.

7. 松下孝幸、2006c：猪の窪古墳人骨。伊予市の歴史文化、第 54 号：18-27.（伊豫市歴史文化の会編集発行）

8. 松下孝幸・他、愛媛県今治市鳥越 1 号墳出土の古墳人骨（投稿中）

9. 松下真実・他、2013：愛媛県今治市古谷犬山谷古墳出土の古墳人骨。
古谷犬山谷古墳（埋蔵文化財発掘調査報告書第 175）：26-31.

表6　顔面頭蓋（mm、度）（Facial skeleton）

		三味線山 2号墳 男性
40.	顔長	–
41.	側顔長	–
42.	下顔長	–
43.	上顔幅	–
45.	頬骨弓幅	–
46.	中顔幅	–
47.	顔高	–
48.	上顔高	–
47/45	顔示数　（K）	–
48/45	上顔示数（K）	–
47/46	顔示数　（V）	–
48/46	上顔示数（V）	–
40+45+47/3	顔面モヂルス	–
50.	前眼窩間幅	–
44.	両眼窩幅	–
50/44	眼窩間示数	–
51.	眼窩幅（右）	–
	（左）	–
52	眼窩高（右）	–
	（左）	–
52/51	眼窩示数（右）	–
	（左）	–
54.	鼻幅	26
55.	鼻高	–
54/55	鼻示数	–
55（1）.	梨状口高	–
56.	鼻骨長	–
57.	鼻骨最小幅	–
57（1）.	鼻骨最大幅	–
60.	上顎歯槽長	–
61.	上顎歯槽幅	65
62.	口蓋長	47
63.	口蓋幅	39
64.	口蓋高	13
61/60	上顎歯槽示数	–
63/62	口蓋示数	82.98
64/63	口蓋高示数	33.33
72.	全側面角	–
73.	鼻側面角	–
74.	歯槽側面角	–

表7　上腕骨（mm）（Humerus）

		三味線山 1号墳1号 男性
1.	上腕骨最大長（右）	–
	（左）	–
2.	上腕骨全長（右）	–
	（左）	–
3.	上端幅（右）	–
	（左）	–
3（1）.	横上径（右）	–
	（左）	–
4.	下端幅（右）	–
	（左）	–
5.	中央最大径（右）	–
	（左）	22
6.	中央最小径（右）	–
	（左）	19
7.	骨体最小周（右）	–
	（左）	69
7（a）.	中央周（右）	–
	（左）	–
8.	頭周　（右）	–
	（左）	–
9.	頭最大横径（右）	–
	（左）	–
10.	頭最大矢状径（右）	–
	（左）	–
11.	滑車幅（右）	–
	（左）	–
12.	小頭幅（右）	–
	（左）	–
12（a）.	滑車幅および小頭幅（右）	–
	（左）	–
13.	滑車深（右）	–
	（左）	–
14.	肘頭窩幅（右）	–
	（左）	–
15.	肘頭窩深（右）	–
	（左）	–
6/5	骨体断面示数（右）	–
	（左）	86.36
7/1	長厚示数（右）	–
	（左）	–

表8　橈骨（mm）（Radius）

		三味線山 2号墳 男性
1.	最大長（右）	–
	（左）	–
1b.	平行長（右）	–
	（左）	–
2.	機能長（右）	–
	（左）	–
3.	最小周（右）	–
	（左）	–
4.	骨体横径（右）	15
	（左）	–
4a.	骨体中央横径（右）	15
	（左）	–
4（1）.	小頭横径（右）	–
	（左）	–
4（2）.	頚横径（右）	12
	（左）	–
5.	骨体矢状径（右）	10
	（左）	–
5a.	骨体中央矢状径（右）	10
	（左）	–
5（1）.	小頭矢状径（右）	–
	（左）	–
5（2）.	頚矢状径（右）	15
	（左）	–
5（3）.	小頭周（右）	–
	（左）	–
5（4）.	頚周　（右）	45
	（左）	–
5（5）.	骨体中央周（右）	40
	（左）	–
5（6）.	骨下端幅（右）	–
	（左）	–
3/	長厚示数（右）	–
	（左）	–
5/4	骨体断面示数（右）	66.67
	（左）	–
5a/4a	中央断面示数（右）	66.67
	（左）	–

表9　大腿骨（mm）（Femur）

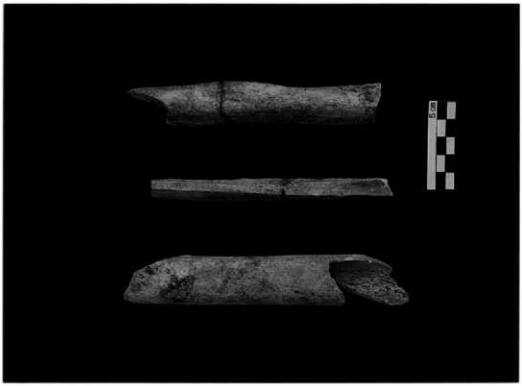
		三味線山 1号墳1号 男性	三味線山 1号墳2号 小児
1.	最大長（右）	−	−
	（左）	−	−
2.	自然位全長（右）	−	−
	（左）	−	−
3.	最大転子長（右）	−	−
	（左）	−	−
4.	自然位転子長（右）	−	−
	（左）	−	−
6.	骨体中央矢状径（右）	31	15
	（左）	−	−
7.	骨体中央横径（右）	27	16
	（左）	−	−
8.	骨体中央周（右）	91	50
	（左）	−	−
9.	骨体上横径（右）	−	19
	（左）	−	−
10.	骨体上矢状径（右）	−	14
	（左）	−	−
15.	頚垂直径（右）	−	−
	（左）	−	−
16.	頚矢状径（右）	−	−
	（左）	−	−
17.	頚周　（右）	−	−
	（左）	−	−
18.	頚垂直径（右）	−	−
	（左）	−	−
19.	頚横径（右）	−	−
	（左）	−	−
20.	頚周　（右）	−	−
	（左）	−	−
21.	上顆幅（右）	−	−
	（左）	−	−
8/2	長厚示数（右）	−	−
	（左）	−	−
6/7	骨体中央断面示数（右）	114.81	93.75
	（左）	−	−
10/9	上骨体断面示数（右）	−	73.68
	（左）	−	−

表10　腓骨（mm）（Fibula）

		三味線山 1号墳 男性
1.	最大長（右）	−
	（左）	−
2.	中央最大径（右）	−
	（左）	17
3.	中央最小径（右）	−
	（左）	11
4.	中央周（右）	−
	（左）	47
4a.	最小周（右）	−
	（左）	−
4b.	頚横径（右）	−
	（左）	−
4c.	頚矢状径（右）	−
	（左）	−
4（1）. 上端幅（右）		−
	（左）	−
4（1a）. 上端矢状幅（右）		−
	（左）	−
4（2）. 下端幅（右）		−
	（左）	−
4（2a）. 下端矢状幅（右）		−
	（左）	−
3/2	中央断面示数（右）	−
	（左）	64.71
4a/1	長厚示数（右）	−
	（左）	−

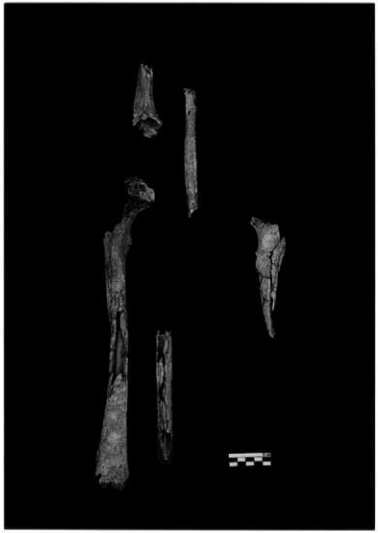
表11　形態小変異（Non-metoric crania variants）

		三味線山 2号墳 男性 右	左
1.	Medial palatine canal	−	−
2.	Pterygospinous foramen	/	/
3.	Hypoglossal canal bridging	/	/
4.	Clinoid bridging	/	/
5.	Condylar canal absent	/	/
6.	Tympanic dehiscence,Foramen of Huschke（>1mm）	/	/
7.	Jugular foramen bridging	/	/
8.	Precondylar tubercle	/	/
9.	Supra-orbital foramen（incl.frontal foramen）	/	/
10.	Accesory infraorbital foramen	/	/
11.	Zygo-facial foramen absent	/	/
12.	Aural exostosis	/	/
13.	Metopism	−	
14.	Os incae	/	
15.	Ossicle at the lambda	/	
16.	Parietal notch bone	/	/
17.	Transverse zygomatic suture（>5mm）	/	/
18.	Asterionic ossicle	/	/
19.	Occipitomastoid ossicle	/	/
20.	Epipteric ossicle	/	/
21.	Frontotemporal articulation	/	/
22.	Biasterionic suture（>10mm）	/	/
23.	Mylohyoid bridging	/	/
24.	Accessory mental foramen	/	/
25.	Mandibular torus	/	/
26.	滑車上孔	/	/



四肢骨（The limb bones）
三味線山古墳１号墳１号人骨（男性・年齢不明）
（The skeleton No.1 − 1, from the Syamisenyama tumulus, male unknown age）

頭蓋・四肢骨（The skull and the limb bones）
三味線山古墳 ST − 1（新生児）
（The skeleton ST − 1, from the Syamisenyama tumulus, newborn）



四肢骨（The limb bones）

頭蓋（The skull）

三味線山古墳２号墳人骨（男性・成年）
（The skeleton No.2, from the Syamisenyama tumulus, adolescent male）

写真図版

写真図版１～10:三味線山古墳

写真図版11～30:船ヶ谷向山古墳

写真図版データ

1．遺構は、6×7判･35㎜判の白黒ネガフィルム･カラーリバーサルフィルムで撮影している。また、35㎜判カラーネガフィルムも保管している。

2．遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カ　メ　ラ	トヨビュー45G
レ　ン　ズ	ジンマーS 240㎜ F 5.6他
ス　ト　ロ　ボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フ　ィ　ル　ム	白　黒　ネオパンアクロス

3．単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引　伸　機	ラッキー450MD・90MS
レ　ン　ズ	エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印　画　紙	イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

4．製　　版：写真図版175線
印　　刷：オフセット印刷
用　　紙：マットコート76.5kg
製　　本：アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』vol.1～20・『報告書制作ガイド』・『文化財写真研究』vol.1～4

［大西 朋子］

1. 調査地遠景
（南西より）

2. 調査前近景
（南より）

3. 調査風景近景
（南西より）

図版2

1. 1号墳横穴式石室検出状況
（南より）

2. 1号墳横穴式石室床面
検出状況　（北より）

3. 1号墳横穴式石室鉄製品
検出状況　（北より）

図版3

1. 1号墳横穴式石室床面調査状況　（南より）

2. 1号墳横穴式石室床面遺物出土状況

3. 1号墳横穴式石室西側壁（南東より）

図版4

1.　1号墳横穴式石室完掘状況
（南西より）

2.　ＳＸ１埴輪出土状況
（東より）

図版5

1.　２号墳箱式石棺露出状況
（南東より）

2.　２号墳箱式石棺被覆粘土の状況　（西より）

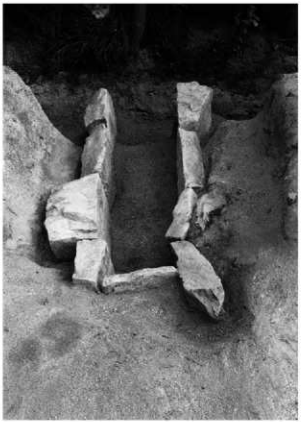
3.　２号墳箱式石棺全景（１）
（北上方より）

図版6

1.　２号墳箱式石棺全景（２）（西より）

2.　２号墳箱式石棺人骨出土状況（１）（西より）

3.　２号墳箱式石棺人骨出土状況（２）（東より）



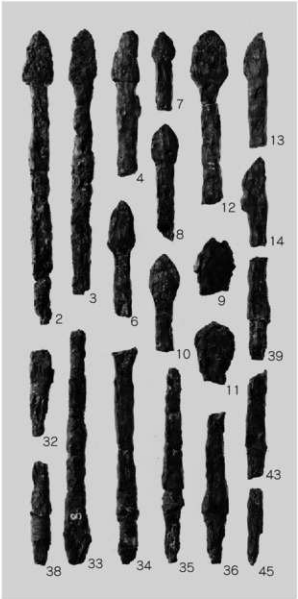
4.　２号墳箱式石棺完掘状況（西より）

1.　１号墳周溝とＳＴ１
（西より）

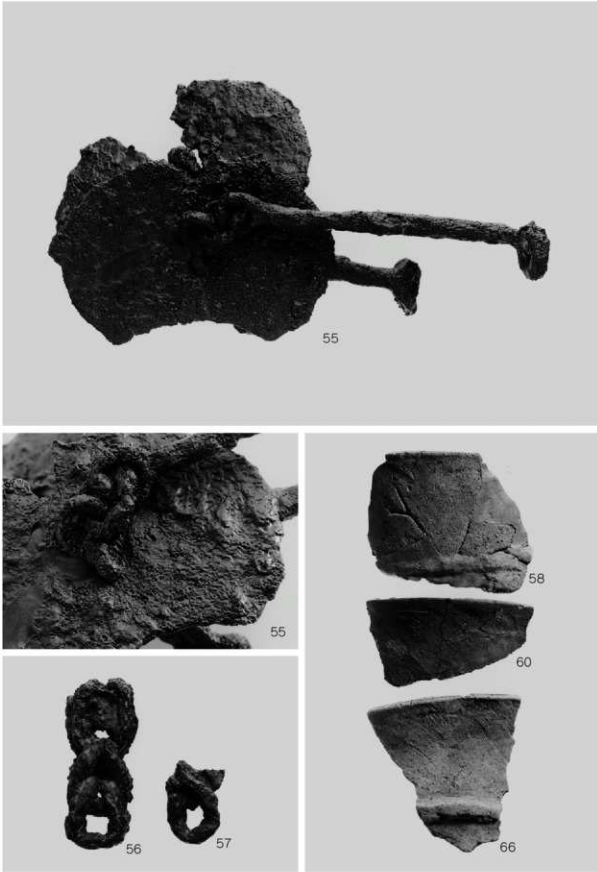
2.　ＳＴ１近景
（西より）

3.　ＳＴ１乳児骨出土状況

図版8

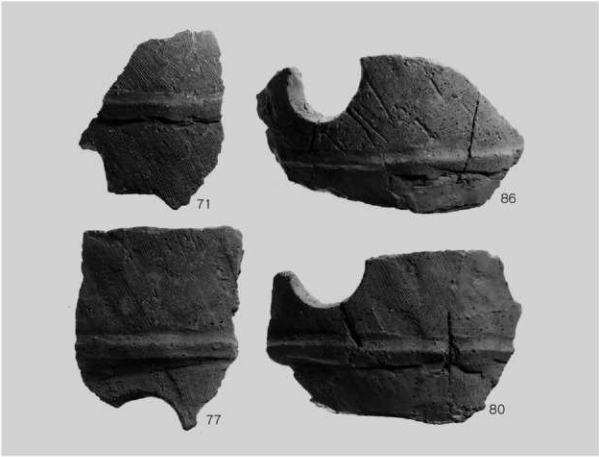


1. 1号墳横穴式石室出土遺物（1）



1. 1号墳横穴式石室出土遺物（2）、SX1出土遺物（1）

図版10



1．ＳＸ１出土遺物（2）、ＳＴ１出土遺物

1. 上空より見た調査地の現況（北西より）

2. 船ヶ谷遺跡２次調査地から望む調査地の現況（東より）

3. 掘削風景（北より）

図版12

1. E区遺物出土状況（1）
（西より）

2. E区遺物出土状況（2）
（南西より）

3. E区遺物出土状況（3）
（北より）

図版13

1. E区馬形植輪出土状況（1）（北より）

2. E区馬形植輪出土状況（2）（北東より）

3. E区馬形植輪出土状況（3）（北西より）

図版14

1. 墳丘６～７区円筒埴輪列（南東より）

2. ７区遺物出土状況（１）（西より）

3. ７区遺物出土状況（２）（北より）

1. ７区遺物出土状況（３）（北西より）

2. ７区人物埴輪出土状況（北西より）

3. ７区家形埴輪出土状況（西より）

図版16

1. 7区鏡形埴輪出土状況（1）
（北より）

2. 7区形象埴輪群（1）
（南東より）

3. 7区形象埴輪群（2）
（北西より）

1. 7区鶏形埴輪出土状況（2）（西より）

2. 7区鶏形埴輪出土状況（3）（北より）

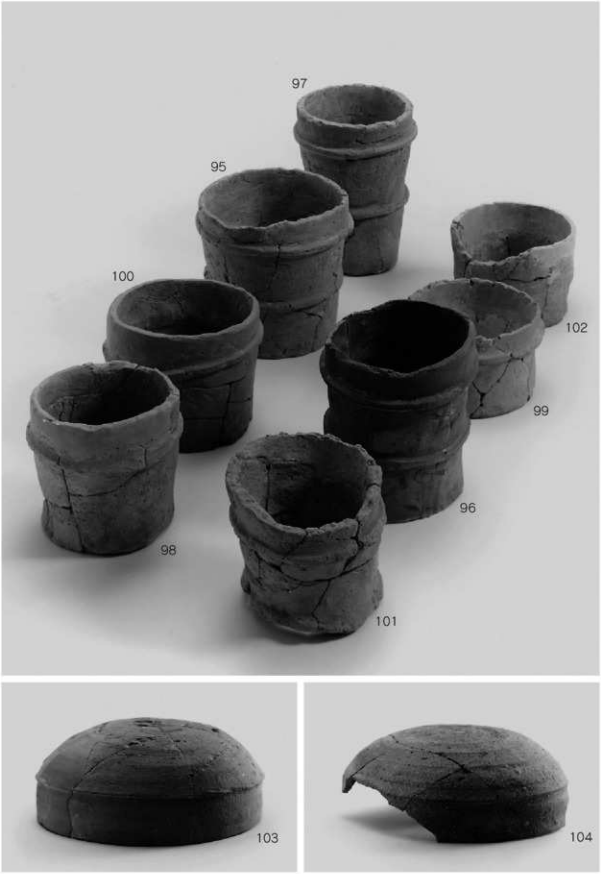
3. 7区鶏形埴輪出土状況（4）（北西より）

図版18

1. 完掘状況全景
（北東より）

2. E区完掘状況
（南東より）

3. 7区完掘状況
（南西より）



1. 円筒埴輪列出土遺物、E区出土遺物（1）

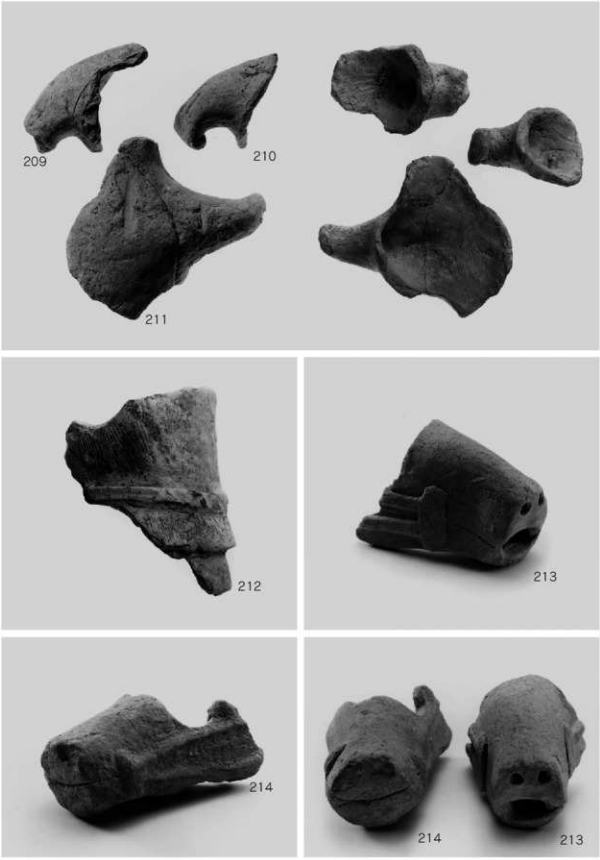
図版20

1. E区出土遺物（2）

1. E区出土遺物（3）

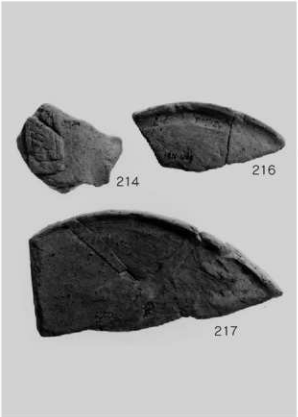
図版22

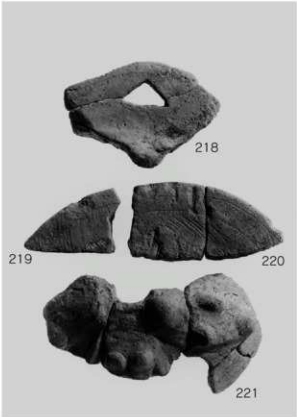
1. E区出土遺物（4）



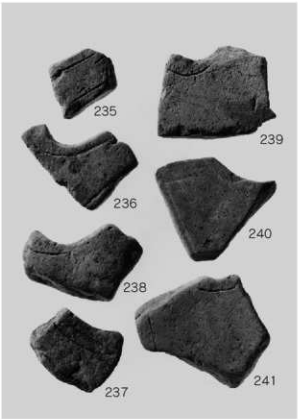
1. E区出土遺物（5）

図版24



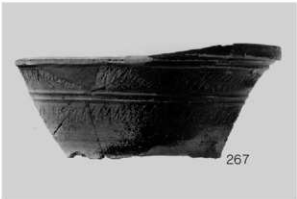


1. E区出土遺物（6）

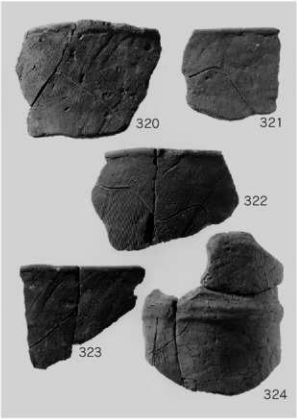


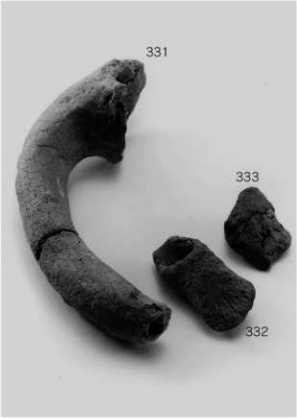
1. E区出土遺物（7）

図版26



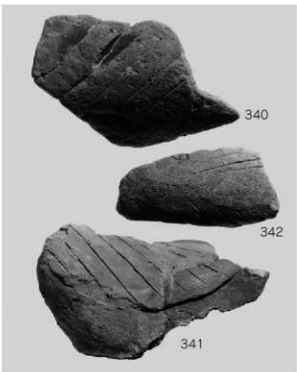
1．７区出土遺物（１）

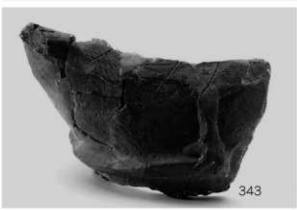




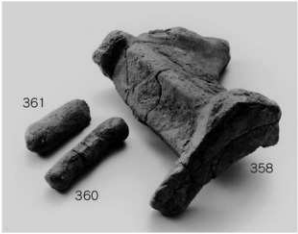
1．７区出土遺物（２）

図版28





1．７区出土遺物（３）



1．７区出土遺物（４）

図版30

1. 出土地不明遺物、古墳に伴わない遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しゃみせんやまこふん・ふねがたにむこうやまこふん
書　　名	三味線山古墳・船ヶ谷向山古墳
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 168 集
編 著 者 名	栗田茂敏・松下真美・松下孝幸
編 集 機 関	公益財団法人　松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター
所　在　地	〒 791 － 8032　愛媛県松山市南斎院町乙 67 番地 6　TEL 089 － 923 － 6363
発行年月日	西暦 2014（平成 26）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
しゃみせんやまこふん 三味線山古墳	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 いわいごにのまち 祝谷東町	3820		33° 51′ 32″	132° 47′ 31″	19811101 / 19811121	350	道路山畑復旧
ふねがたにむこうやまこふん 船ヶ谷向山古墳	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 ふねがたちょう 船ヶ谷町	3820		33° 52′ 11″	132° 44′ 00″	19880601 / 19880701	4,135.33	宗教法人教団施設建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三味線山古墳	古墳	古墳	横穴式石室 周溝 箱型石棺 周溝 土器棺墓	須恵器、埴輪、馬具、農工具、人骨 人骨 人骨	墳形不明、6 世紀中 墳形・時期不明 前期、乳児埋葬
船ヶ谷向山古墳	古墳	古墳	墳丘	須恵器、円筒、朝顔、形象埴輪	前方後円墳、5 世紀末

要　約	松山市北部域で 1980 年代に行われた古墳の調査 2 件。いずれも調査後消滅。船ヶ谷向山古墳は前方後円墳で 5 世紀末のもの。形象埴輪のうち、動物埴輪に比較的良好なものがある。

松山市文化財調査報告書　第168集

三味線山古墳
船ヶ谷向山古墳

平成26年3月31日　発行

編集・発行　公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター
〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923－6363
松山市教育委員会
〒790－0003　松山市三番町六丁目6番地1
TEL（089）948－6605

印刷　岡田印刷株式会社
〒790－0012　松山市湊町7丁目1－8
TEL（089）941－9111